JAEA-Review 2024-045 DOI:10.11484/jaea-review-2024-045



第9回「次世代イニシアティブ廃炉技術カンファレンス (NDEC-9)」報告集

Proceedings of the 9th "Conference for R&D Initiative on Nuclear Decommissioning Technology by the Next Generation"

(編) 宇佐美 博士 伊藤 倫太郎 田川 明広

(Eds.) Hiroshi USAMI, Rintaro ITO and Akihiro TAGAWA

福島廃炉安全工学研究所 廃炉環境国際共同研究センター

Collaborative Laboratories for Advanced Decommissioning Science Fukushima Research and Engineering Institute

December 2024

ergy Agency | 日本原子力研究開発機構

Japan Atomic Energy Agency

本レポートは国立研究開発法人日本原子力研究開発機構が不定期に発行する成果報告書です。 本レポートの転載等の著作権利用は許可が必要です。本レポートの入手並びに成果の利用(データを含む) は、下記までお問い合わせ下さい。 なお、本レポートの全文は日本原子力研究開発機構ウェブサイト(<u>https://www.jaea.go.jp</u>) より発信されています。

国立研究開発法人日本原子力研究開発機構 研究開発推進部 科学技術情報課 〒 319-1112 茨城県那珂郡東海村大字村松 4 番地 49 E-mail: ird-support@jaea.go.jp

This report is issued irregularly by Japan Atomic Energy Agency. Reuse and reproduction of this report (including data) is required permission. Availability and use of the results of this report, please contact Library, Institutional Repository and INIS Section, Research and Development Promotion Department, Japan Atomic Energy Agency. 4-49 Muramatsu, Tokai-mura, Naka-gun, Ibaraki-ken 319-1112, Japan E-mail: ird-support@jaea.go.jp

© Japan Atomic Energy Agency, 2024

第9回「次世代イニシアティブ廃炉技術カンファレンス(NDEC-9)」報告集

日本原子力研究開発機構 福島廃炉安全工学研究所 廃炉環境国際共同研究センター

(編) 宇佐美 博士、伊藤 倫太郎、田川 明広

(2024年9月24日受理)

東京電力ホールディングス(株)福島第一原子力発電所の廃止措置は、長期にわたるプロジェクトであり、このようなプロジェクトを遂行していくには、今後の廃止措置を担う若い技術 者や研究者の育成が必要かつ喫緊の課題となっている。

この課題に対し、福島廃炉安全工学研究所 廃炉環境国際共同研究センターでは、廃炉研究に 取り組んでいる学生のための「次世代イニシアティブ廃炉技術カンファレンス (Conference for R&D Initiative on Nuclear Decommissioning Technology by the Next Generation : NDEC)」 を 2016 年から継続的に開催してきている。

NDECは、人材育成と若手研究者ネットワーク形成を目的とした学生の研究成果発表の場で あり、廃止措置に関係する若者が互いに成果を発表し、切磋琢磨することで研究活動に対する モチベーションを高めることを目的として実施している。

第9回目となる NDEC-9 を、2024 年 3 月 21 日 (木) -22 日 (金) の 2 日間にわたり、福島 県双葉郡富岡町の文化交流センター「学びの森」で開催した。

本報告集は、これらの発表内容をまとめ、NDECの活動を広く周知するために公開するものである。

i

JAEA-Review 2024-045

Proceedings of the 9th "Conference for R&D Initiative on Nuclear Decommissioning Technology by the Next Generation"

(Eds.) Hiroshi USAMI, Rintaro ITO and Akihiro TAGAWA

Collaborative Laboratories for Advanced Decommissioning Science Fukushima Research and Engineering Institute Japan Atomic Energy Agency Tomioka-machi, Futaba-gun, Fukushima-ken

(Received September 24, 2024)

The decommissioning of the TEPCO's Fukushima Daiichi Nuclear Power Station is a long-term project, and the training of young engineers and researchers who will be responsible for future decommissioning is a necessary and urgent task.

Since 2016, Collaborative Laboratories for Advanced Decommissioning Science has been continuously organizing "Conferences for R&D Initiative on Nuclear Decommissioning Technology by the Next Generation (NDEC)" for students who are engaged in research activities for decommissioning.

NDEC is a forum for students to present their research for the purpose of human resource development and networking among young researchers, and to increase their motivation for decommissioning research.

NDEC-9 was held at "Manabi-no-Mori" in Tomioka-machi, Fukushima Prefecture, from March 21-22, 2024.

This proceeding compiles the contents of report papers in the conference.

Keywords: Decommissioning, Development of Human Resources, Fukushima Daiichi Nuclear Power Station

目 次

1.	はじめに1
2.	NDEC-9 全体プログラム2
3. 3	学生発表(オーラル)3 .1 セッション1(燃料デブリ取り出し・廃止措置関連技術部門)3 3.1.1 廃炉創造ロボコンにおける高所壁面除染ロボットの開発 ~通信ケーブル巻取ロボット~
	宮山 昇太郎、田中 昭雄(小山工業高等専門学校)5
	 3.1.2 廃炉創造ロボコンにおける高所壁面除染ロボットの開発 ~多段垂直アーム高所壁面除染ロボット~ 佐藤 佑海、田中 昭雄(小山工業高等専門学校)6
	 3.1.3 廃炉創造ロボコンにおける立体除染ロボットの製作 中川 岬、堤 哲之介、黒木 和維、財津 太一、志賀 俊介、吉村 勇太朗、高倉 健一郎 (熊本高等専門学校)7
	 3.1.4 サブテラヘルツ波を用いたコンクリート中の鉄筋健全性評価に関する基礎的研究 倉品 吏玖¹、小林 知大¹、西脇 智哉¹、田中 章夫² (¹東北大学、²日本工業大学)8
	 3.1.5 Development of the electrical spray charging system for aerosol control in Fukushima Daiichi decommissioning Ruicong XU, Avadhesh Kumar SHARMA, Shuichiro MIWA, Shunichi SUZUKI (東京大学)
	 3.1.6 五ホウ酸ナトリウム添加を想定した環境における炭素鋼の SCC 感受性および進展性に関する研究 小沼 佳月¹、阿部 博志¹、渡邉 豊¹、深谷 祐一²(¹東北大学、²東京電力)10
	 3.1.7 Automatic Selection of Observation Positions for Rail-Mounted Robots to Assist Teleoperation in Nuclear Decommissioning Scenarios 劉 子萱、中島 慎介、小松 廉、松日楽 信人、淺間 一、安 琪、山下 淳 (東京大学)11

3.1.6 之本於了、一個用於個種目的用目的》個盔正不住因乎這項几
里見 穂、鈴木 俊一(東京大学)12
3.2 セッション2(燃料デブリ・放射性廃棄物の処理・処分技術部門)13
3.2.1 U ₃ O ₈ -Fe ₂ O ₃ 系燃料デブリの相関係の評価
岩原 聖樹、秋山 大輔、桐島 陽(東北大学)15
3.2.2 Cs 汚染コンクリートに対する浸透・溶出挙動の研究
-Cs 汚染コンクリートの分配係数の時間変化-
川名 芳佳、近藤 幸祐、佐藤 勇、栗原 哲彦(東京都市大学)
3.2.3 Investigation of molten metal spreading behavior on substrate with different
surface roughness
Yihua XU, Ryo Yokoyama, Shunichi Suzuki(東京大学)17
3.2.4 放射性ニオブのシリカゲルによる分別処理と分析化学的応用
長沼 和希 1、松枝 誠 2、柳澤 華代 1、及川 博士 3、橋本 淳一 3、高貝 慶隆 1
(¹ 福島大学、 ² 原子力機構、 ³ ジーエルサイエンス)18
3.2.5 燃料デブリ収納缶での水素低減を目的とした触媒開発に係る研究
-y線照射による水素発生対策添加剤機能評価-
樽見 直樹 ¹ 、野田 篤志 ² 、佐藤 勇 ¹ 、鈴木 俊一 ² (¹ 東京都市大学、 ² 東京大学) 19
3.2.6 高アルカリ地下水流動場におけるセメント系バリアの見かけの成長速度の評価
3.2.6 高アルカリ地下水流動場におけるセメント系バリアの見かけの成長速度の評価 永井 翔、関 亜美、千田 太詩、新堀 雄一(東北大学)
3.2.6 高アルカリ地下水流動場におけるセメント系バリアの見かけの成長速度の評価 永井 翔、関 亜美、千田 太詩、新堀 雄一(東北大学)20
 3.2.6 高アルカリ地下水流動場におけるセメント系バリアの見かけの成長速度の評価 永井 翔、関 亜美、千田 太詩、新堀 雄一(東北大学)20 3.2.7 Basic study about dissolution Method of Simulated nuclear fuel debris by
 3.2.6 高アルカリ地下水流動場におけるセメント系バリアの見かけの成長速度の評価 永井 翔、関 亜美、千田 太詩、新堀 雄一(東北大学)20 3.2.7 Basic study about dissolution Method of Simulated nuclear fuel debris by Thermochemical Conversion for Actinide Analysis
 3.2.6 高アルカリ地下水流動場におけるセメント系バリアの見かけの成長速度の評価 永井 翔、関 亜美、千田 太詩、新堀 雄一 (東北大学)20 3.2.7 Basic study about dissolution Method of Simulated nuclear fuel debris by Thermochemical Conversion for Actinide Analysis ZhuoRan Ma¹, Tatsuya Suzuki¹, Yoshiya Homma², Kenji Konashi²
 3.2.6 高アルカリ地下水流動場におけるセメント系バリアの見かけの成長速度の評価 永井 翔、関 亜美、千田 太詩、新堀 雄一(東北大学)20 3.2.7 Basic study about dissolution Method of Simulated nuclear fuel debris by Thermochemical Conversion for Actinide Analysis ZhuoRan Ma¹, Tatsuya Suzuki¹, Yoshiya Homma², Kenji Konashi² (¹長岡技術科学大学、²東北大学)21
 3.2.6 高アルカリ地下水流動場におけるセメント系バリアの見かけの成長速度の評価 永井 翔、関 亜美、千田 太詩、新堀 雄一(東北大学)
 3.2.6 高アルカリ地下水流動場におけるセメント系バリアの見かけの成長速度の評価 永井 翔、関 亜美、千田 太詩、新堀 雄一(東北大学)20 3.2.7 Basic study about dissolution Method of Simulated nuclear fuel debris by Thermochemical Conversion for Actinide Analysis ZhuoRan Ma¹, Tatsuya Suzuki¹, Yoshiya Homma², Kenji Konashi² (¹長岡技術科学大学、²東北大学)
 3.2.6 高アルカリ地下水流動場におけるセメント系バリアの見かけの成長速度の評価 永井 翔、関 亜美、千田 太詩、新堀 雄一(東北大学)
 3.2.6 高アルカリ地下水流動場におけるセメント系バリアの見かけの成長速度の評価 水井 翔、関 亜美、千田 太詩、新堀 雄一(東北大学)
 3.2.6 高アルカリ地下水流動場におけるセメント系バリアの見かけの成長速度の評価 永井 翔、関 亜美、千田 太詩、新堀 雄一(東北大学)
 3.2.6 高アルカリ地下水流動場におけるセメント系バリアの見かけの成長速度の評価 永井 翔、関 亜美、千田 太詩、新堀 雄一(東北大学)

菊地 航平¹、鈴木 武志²、荘司 成熙³、木倉 宏成¹

(1東京工業大学、2東京電力、3室蘭工業大学) ------25

- 3.3.2 ガンマ線エネルギースペクトルデータを用いた機械学習による線源分布推定 熊田 有華(福島大学) ------26

- 3.3.5 同位体分析装置による少量燃料デブリの性状把握分析手法の確立
 吉村 昌稀¹、森田 真人¹、坂本 哲夫¹、富田 英生²、三浦 裕樹²、岩田 圭弘³、
 宮部 昌文³、関尾 佳弘³、前田 宏治³、溝上 暢人⁴
 (¹工学院大学、²名古屋大学、³原子力機構、⁴東京電力) ------29
- 3.3.6 廃炉に向けた中性子検出用新規シンチレータ結晶の開発浦野 雄介、黒澤 俊介、山路 晃広、吉川 彰(東北大学) -------30

- - 4.1.1 機械学習を用いた燃料デブリ収納缶における放射線源分布の推定 佐藤 大耀、山口 克彦(福島大学)------35
 - 4.1.2 PCV 内部調査動画の利活用支援システムの開発に向けた予備的研究 木村 朋希、尾形 祥浩、佐々木 健太、藤本 勝成(福島大学) -------36
 - 4.1.3 環境にロバストな立体型パッシブ無線センサタグの開発内山 実則、久我 宣裕(横浜国立大学) -------37

	4.1.4 周波数走査型パッシブ無線センサタグに関する研究
	芹澤 伊織、久我 宣裕(横浜国立大学)38
	4.1.5 マイクロデバイスによる模擬燃料デブリ溶解メカニズムに関する研究
	Tongyu XU, Naokazu Idota, Takehiko Tsukahara(東京工業大学)39
	4.1.6 FPGA に実装する耐放射線 AI
	丁 海濤、渡邊 実、渡邊 誠也(岡山大学)40
4	.2 グループ 241
	4.2.1 核分裂生成物の有効利用に関する検討
	-第一原理計算を用いた白金族合金の触媒機能評価-
	杉崎 麻子 1、樽見 直樹 1、佐藤 勇 1、鈴木 俊一 2(1 東京都市大学、2 東京大学)43
	4.2.2 金属系燃料デブリの材料推定に関する基礎的研究
	·部分溶出した金属イオンの ICP-MS 分析とパターン分類-
	十文字 快 1、嘉山 馨菜 1、勝又 風雅 1、丹治 珠緒 1、古川 真 2、
	高貝 慶隆 1、藤本 勝成 1
	(1福島大学、2パーキンエルマー)44
	(1福島大学、2パーキンエルマー)44
	 (1福島大学、2パーキンエルマー)44 4.2.3 デブリサンプリングデータから作成された凝固経路図の実験的検証
	 (1福島大学、2パーキンエルマー)44 4.2.3 デブリサンプリングデータから作成された凝固経路図の実験的検証 秋元 佑介、宇埜 正美(福井大学)45
	 (1福島大学、2パーキンエルマー)
	 (1福島大学、2パーキンエルマー) 44 4.2.3 デブリサンプリングデータから作成された凝固経路図の実験的検証 秋元 佑介、字埜 正美(福井大学) 45 4.2.4 Fundamental Study on Chromatographic Separation Behavior of Minor Actinides and Lanthanides using TODGA Resin in Low Concentration Nitric Acid Andri Rahma Putra¹, Hiroyuki Kazama², Chikage Abe³, Tatsuya Suzuki¹ (1長岡技術科学大学、2原子力機構、3東北大学) 46 4.2.5 ICP-MS 分析のためのピロリドン樹脂を用いたアクチノイド分離 和田 一直1 回開 約行2 鈴木 遠山1 出来 一共3 小無 健司3
	 (1福島大学、2パーキンエルマー)
	 (1福島大学、2パーキンエルマー) 44 4.2.3 デブリサンプリングデータから作成された凝固経路図の実験的検証 秋元 佑介、字埜 正美(福井大学) 45 4.2.4 Fundamental Study on Chromatographic Separation Behavior of Minor Actinides and Lanthanides using TODGA Resin in Low Concentration Nitric Acid Andri Rahma Putra¹, Hiroyuki Kazama², Chikage Abe³, Tatsuya Suzuki¹ (1長岡技術科学大学、2原子力機構、3東北大学) 46 4.2.5 ICP-MS 分析のためのピロリドン樹脂を用いたアクチノイド分離 和田 一真 1、風間 裕行 2、鈴木 達也 1、出光 一哉 3、小無 健司 3 (1長岡技術科学大学、2原子力機構、3東北大学) 47
	 (1福島大学、2パーキンエルマー) 44 4.2.3 デブリサンプリングデータから作成された凝固経路図の実験的検証 秋元 佑介、字埜 正美(福井大学) 45 4.2.4 Fundamental Study on Chromatographic Separation Behavior of Minor Actinides and Lanthanides using TODGA Resin in Low Concentration Nitric Acid Andri Rahma Putra¹, Hiroyuki Kazama², Chikage Abe³, Tatsuya Suzuki¹ (1長岡技術科学大学、2原子力機構、3東北大学) 46 4.2.5 ICP-MS 分析のためのピロリドン樹脂を用いたアクチノイド分離 和田 一真¹、風間 裕行²、鈴木 達也¹、出光 一哉³、小無 健司³ (1長岡技術科学大学、2原子力機構、3東北大学) 47
	 (1福島大学、2パーキンエルマー) 44 4.2.3 デブリサンプリングデータから作成された凝固経路図の実験的検証 秋元 佑介、字埜 正美(福井大学) 45 4.2.4 Fundamental Study on Chromatographic Separation Behavior of Minor Actinides and Lanthanides using TODGA Resin in Low Concentration Nitric Acid Andri Rahma Putra¹, Hiroyuki Kazama², Chikage Abe³, Tatsuya Suzuki¹ (1長岡技術科学大学、2原子力機構、3東北大学) 46 4.2.5 ICP-MS分析のためのピロリドン樹脂を用いたアクチノイド分離 和田 一真¹、風間 裕行²、鈴木 達也¹、出光 一哉³、小無 健司³ (1長岡技術科学大学、2原子力機構、3東北大学) 47 4.2.6 深共晶溶媒を用いる新規セシウム分離回収法の開発と性能評価 鉄 広逸 安原 剛彦 共同田 直和(東京工業大学) 48
	 (1福島大学、2パーキンエルマー) 44 4.2.3 デブリサンプリングデータから作成された凝固経路図の実験的検証 秋元 佑介、字埜 正美(福井大学) 45 4.2.4 Fundamental Study on Chromatographic Separation Behavior of Minor Actinides and Lanthanides using TODGA Resin in Low Concentration Nitric Acid Andri Rahma Putra¹, Hiroyuki Kazama², Chikage Abe³, Tatsuya Suzuki¹ (1長岡技術科学大学、2原子力機構、3東北大学) 46 4.2.5 ICP-MS 分析のためのピロリドン樹脂を用いたアクチノイド分離 和田 一真 1、風間 裕行 2、鈴木 達也 1、出光 一哉 3、小無 健司 3 (1長岡技術科学大学、2原子力機構、3東北大学) 47 4.2.6 深共晶溶媒を用いる新規セシウム分離回収法の開発と性能評価 銭 欣逸、塚原 剛彦、井戸田 直和(東京工業大学) 48
5	 (1福島大学、2パーキンエルマー) 44 4.2.3 デブリサンプリングデータから作成された凝固経路図の実験的検証 秋元 佑介、宇埜 正美(福井大学) 45 4.2.4 Fundamental Study on Chromatographic Separation Behavior of Minor Actinides and Lanthanides using TODGA Resin in Low Concentration Nitric Acid Andri Rahma Putra¹, Hiroyuki Kazama², Chikage Abe³, Tatsuya Suzuki¹ (¹長岡技術科学大学、²原子力機構、³東北大学) 46 4.2.5 ICP-MS 分析のためのピロリドン樹脂を用いたアクチノイド分離 和田 一真¹、風間 裕行²、鈴木 達也¹、出光 一哉³、小無 健司³ (¹長岡技術科学大学、²原子力機構、³東北大学) 47 4.2.6 深共晶溶媒を用いる新規セシウム分離回収法の開発と性能評価 銭 欣逸、塚原 剛彦、井戸田 直和(東京工業大学) 48
5.	 (1福島大学、2パーキンエルマー) 44 4.2.3 デブリサンプリングデータから作成された凝固経路図の実験的検証 秋元 佑介、字埜 正美(福井大学) 45 4.2.4 Fundamental Study on Chromatographic Separation Behavior of Minor Actinides and Lanthanides using TODGA Resin in Low Concentration Nitric Acid Andri Rahma Putra¹, Hiroyuki Kazama², Chikage Abe³, Tatsuya Suzuki¹ (1長岡技術科学大学、2原子力機構、3東北大学) 46 4.2.5 ICP-MS 分析のためのピロリドン樹脂を用いたアクチノイド分離 和田 一真¹、風間 裕行²、鈴木 達也¹、出光 一哉³、小無 健司³ (¹長岡技術科学大学、2原子力機構、3東北大学) 47 4.2.6 深共晶溶媒を用いる新規セシウム分離回収法の開発と性能評価 銭 欣逸、塚原 剛彦、井戸田 直和(東京工業大学) 48 NDEC-9 実行委員会名簿 49

Contents

1.	Introduction1
2.	Program of NDEC-92
3. E	Presented at Oral Sessions
	 3.1.2 Development of a Robot for Decontamination of High-Elevation Walls in the Creative Robot Contest for Decommissioning ~Multi-stage vertical arm high wall decontamination robot~ Yuma SATO, Akio TANAKA (National Institute of Technology, Oyama College)6
	 3.1.3 Creation of a three-dimensional decontamination robot in the Creation Robot Contest for Decommissioning Misaki NAKAGAWA, Akinosuke TSUTSUMI, Kazui KUROKI, Taichi ZAITSU, Shunsuke SHIGA, Yutaro YOSHIMURA, Kenichiro TAKAKURA (National Institute of Technology, Kumamoto College)7
	 3.1.4 Fundamental Study on Evaluation of Rebar Integrity in Concrete by Sub-Terrahertz Wave Riku KURASHINA¹, Chihiro KOBAYASHI¹, Tomoya NISHIWAKI¹, Akio TANAKA² (¹Tohoku Univ., ²Nippon Institute of Technology)8
	 3.1.5 Development of the Electrical Spray Charging System for Aerosol Control in Fukushima Daiichi Decommissioning Ruicong XU, Avadhesh Kumar SHARMA, Shuichiro MIWA, Shunichi SUZUKI (The University of Tokyo)9

3.1.6 Study on SCC Susceptibility and Progressivity of Carbon Steel in Environments Assuming Addition of Sodium Pentaborate

Katsuki ONUMA ¹ , Hiroshi ABE ¹ , Yutaka WATANABE ¹ , Yuichi FUKAYA ²	
(¹ Tohoku Univ., ² TEPCO)1	.0
3.1.7 Automatic Selection of Observation Positions for Rail-Mounted Robots to Assis Teleoperation in Nuclear Decommissioning Scenarios	st
Zixuan LIU, Shinsuke NAKAJIMA, Ren KOMATSU, Nobuto MATSUHIRA, Hajim ASAMA, Qi AN, Atsushi YAMASHITA	ıe
(The University of Tokyo)1	1
3.1.8 Study on water sealing of the containment vessel lower opening usin geopolymer	ıg
Sui SATOMI, Shunichi SUZUKI (The University of Tokyo)1	.2
 3.2 Session 2 (Fuel-Debris and Radioactive-Waste Processing and Disposal Technology 3.2.1 Evaluation of phase relations of U₃O₈-Fe₂O₃ fuel debris 	y)13
Toshiki IWAHARA, Daisuke AKIYAMA, Akira KIRISHIMA (Tohoku Univ.)1	.5
3.2.2 Study of permeation and leaching behavior of Cs-contaminated concrete - Time variation of distribution coefficients of Cs-contaminated concrete	, -
Yoshika KAWANA, Kousuke KONDO, Isamu SATO, Norihiko KURIHARA (Tokyo City Univ.)1	.6
3.2.3 Investigation of molten metal spreading behavior on substrate with differer surface roughness	nt
Yihua XU, Ryo YOKOYAMA, Shunichi SUZUKI (The University of Tokyo)1	7
3.2.4 Fractionation treatment of radioactive niobium with silica gel and analytica chemical application	al
Kazuki NAGANUMA ¹ , Makoto MATSUEDA ² , Kayo YANAGISAWA ¹ , Hirosh OIKAWA ³ , Junichi HASHIMOTO ³ , Yoshitaka TAKAGAI ¹	ni
(1Fukushima Univ., 2JAEA, 3GL Sciences Inc.)1	.8
3.2.5 Research on Catalyst Development for Hydrogen Reduction in Fuel Debri Storage Cans	is
- Functional evaluation of additives for prevention of hydrogen generation by γ -ration disting a	ıy
irradiation - Naoki TARUMI ¹ , Atsushi NODA ² , Isamu SATO ¹ , Shuinchi SUZUKI ²	
(¹ Tokyo City Univ., ² The University of Tokyo)1	9

3.2.6 Evaluation of Apparent Growth Rate of Cementitious Barriers in High Alkaline Groundwater Flow Field
Sho NAGAI, Tsugumi SEKI, Taiji CHIDA, Yuichi NIIBORI (Tohoku Univ.)20
 3.2.7 Basic study about Dissolution Method of Simulated Nuclear Fuel Debris by Thermochemical Conversion for Actinide Analysis ZhuoRan MA¹, Tatsuya SUZUKI¹, Yoshiya HOMMA², Kenji KONASHI² (¹Nagaoka University of Technology, ²Tohoku Univ.)21
 3.2.8 Risk Management Studies with Probabilistic and Corrective Action Programs in Decommissioning Plants Masao UESAKA¹, Kenta MURAKAMI² (¹Nagaoka University of Technology, ²The University of Tokyo)22
 3.3 Session 3 (Measurement and Analytical Technology)23 3.3.1 Fundamental research on the development of water level measurement method using oblique incidence ultrasonic waves Kohei KIKUCHI¹, Takeshi SUZUKI², Naruki SHOJI³, Hiroshige KIKURA¹ (¹Tokyo Institute of Technology, ²TEPCO, ³Muroran Institute of Technology) 25
 3.3.2 Source distribution estimation by machine learning using gamma-ray energy spectrum data Yuka KUMADA (Fukushima Univ.)26
 3.3.3 3D Extension of Machine Learning Methods for Radiation Source Distribution Estimation Yuto KONDO (Fukushima Univ.)27
 3.3.4 Development of software to assist in improving the efficiency of mass spectrometry imaging Kayo YANAGISAWA¹, Hiromi YOKOTA¹, Makoto MATSUEDA², Hiroko ISHINIWA¹, Katsushige FUJIMOTO¹, Yoshitaka TAKAGAI¹ (¹Fukushima Univ., ²JAEA)28

3.3.5 Establishment of a method for analyzing small amounts of fuel debris using an isotope analyzer to determine its properties
 Shoki YOSHIMURA¹, Masato MORITA¹, Tetsuo SAKAMOTO¹, Hideki TOMITA²,

Hiroki MIURA², Yoshihiro IWATA³, Masabumi MIYABE³, Yoshihiro SEKIO³, Koji MAEDA³, Masato MIZOKAMI4
(¹ Kogakuin University, ² Nagoya Univ., ³ JAEA, ⁴ TEPCO)29
3.3.6 Development of New Scintillator Crystals for Neutron Detection for Decommissioning Yusuke URANO, Shunsuke KUROSAWA, Akihiro YAMAJI, Akira YOSHIKAWA
(Tohoku Univ.)30
3.3.7 Development of an embedded system combining camera image analysis and wireless UWB for real-time 3D position measurement
Kimihiko IWATA, Kojiro MATSUSHITA (Gifu Univ.)31
3.3.8 A Study of Business Models for Handling Objects Subject to the Clearance System
-A Case Study of the Exchange of Opinions with San Onofre Nuclear Power Station- Yasunobu TAKINAMI (Saitama Univ.)
4. Presented at Poster Session
4.1 Group 1
4.1.1 Estimation of Radiation Source Distribution in Fuel Debris Storage Cans Using Machine Learning
Taiyo SATO, Katsuhiko YAMAGUCHI (Fukushima Univ.)35
4.1.2 Preliminary Study for the Development of Support System for Utilization of PCV Internal Investigation Videos
Tomoki KIMURA, Akihiro OGATA, Kenta SASAKI, Katsushige FUJIMOTO (Fukushima Univ.)36
4.1.3 Development of Environmentally Robust Three-Dimensional Passive Wireless Sensor Tag
Minori UCHIYAMA, Nobuhiro KUGA (Yokohama National Univ.)37
4.1.4 Research on frequency scanning passive wireless sensor tag
Iori SERIZAWA, Nobuhiro KUGA (Yokohama National Univ.)38
4.1.5 Study on dissolution mechanism of simulated fuel debris by microdevices

Tongyu XU, Naokazu IDOTA, Takehiko TSUKAHARA

(Tokyo Institute of Technology)	9
4.1.6 Radiation-resistant AI implemented in FPGA	
Ding HAITAO, Minoru WATANABE, Seiya WATANABE (Okayama Univ.)4	0
4.2 Group 24	1
4.2.1 Research on Effective Utilization of Fission Products	
-Evaluation of Catalytic Function of Platinum Group Alloys Using First-Principle Calculations-	s
Asako SUGIZAKI ¹ , Naoki TARUMI ¹ , Isamu SATO ¹ , Shunichi SUZUKI ²	
(¹ Tokyo City Univ., ² The University of Tokyo)4	3
4.2.2 Fundamental Study on Material Estimation of Metallic Fuel Debris	
-ICP-MS Analysis and Pattern Classification of Partially Eluted Metal Ions-	
Kai JUMONJI ¹ , Kana KAYAMA ¹ , Fuga KATSUMATA ¹ , Tamao TANJI ¹ , Makot	0
FURUKAWA ² , Yoshitaka TAKAGAI ¹ , Katsushige FUJIMOTO ¹	
(¹ Fukushima Univ., ² PerkinElmer)4	4
4.2.3 Experimental validation of solidification path diagrams created from fuel debri sampling data	s
Yusuke AKIMOTO, Masami UNO(Fukui Univ.)4	5
4.2.4 Fundamental Study on Chromatographic Separation Behavior of Mino Actinides and Lanthanides using TODGA Resin in Low Concentration Nitric Acid Andri RAHMA PUTRA ¹ , Hiroyuki KAZAMA ² , Chikage ABE ³ , Tatsuya SUZUKI ¹ (¹ Nagaoka University of Technology, ² JAEA, ³ Tohoku Univ.)4	r 6
4.2.5 Actinide separation using pyrrolidone resin for ICP-MS analysis	
Kazuma WADA ¹ , Hiroyuki KAZAMA ² , Tatsuya SUZUKI ¹ , Kazuya IDEMITSU Kenji KONASHI ³	³ ,
(¹ Nagaoka University of Technology, ² JAEA, ³ Tohoku Univ.)4	7
4.2.6 Development and Performance Evaluation of a Novel Method for Cesium	n
Separation and Recovery Using Deep Eutectic Solvent	
Yi Wei ZHANG, Takehiko TSUKAHARA, Naokazu IDOTA	
(Tokyo Institute of Technology)4	8
5. List of NDEC-9 Executive Committee Members4	9

This is a blank page.

1. はじめに

国立研究開発法人日本原子力研究開発機構(以下、原子力機構)福島廃炉安全工学研究所 廃 炉環境国際共同研究センターは、政府の「東京電力ホールディングス(株)福島第一原子力発 電所の廃止措置等に向けた中長期ロードマップ」等を踏まえ、福島第一原子力発電所廃炉に係 る研究開発を一体的に進める研究体として 2015 年に原子力機構福島研究開発部門に廃炉国際 共同研究センター (Collaborative Laboratories for Advanced Decommissioning Science : CLADS) として組織された。

CLADS の使命は、国内外の英知を結集し、福島第一原子力発電所の廃止措置等に向けた研 究開発・人材育成を加速させるため、CLADS を中核とし、廃炉現場のニーズを一層踏まえた 国内外の研究機関等との研究開発・人材育成の取組を推進することである。

本報告集で取りまとめた次世代イニシアティブ廃炉技術カンファレンス(NDEC)は、文部 科学省からの補助事業として CLADS が実施している「英知を結集した原子力科学技術・人材 育成推進事業」における第一期の人材育成プログラム採択校(東京大学、東北大学、東京工業 大学、福島大学、福島工業高等専門学校、早稲田大学)が自ら実行委員会を組織し、福島第一 原子力発電所の廃炉に向けた研究開発に打ち込む学生同士の交流の場として、また実際に現場 で活動している方々との意見交換を通して、学生の廃炉研究に対するモチベーションを高める ためのイベントとして、2016 年度に企画・組織した会議体であり、以降毎年度継続して開催し てきている*。

本報告集は、2023年度に開催した NDEC-9 における発表内容をまとめたものである。

※ 本会議体は当初は大学・高専等による自主運営であったが、2020 年度より原子力機構 CLADS が共催として加わり、本会議体を通じた廃炉人材育成事業をサポートしている。

2. NDEC-9 全体プログラム

全体プログラム(2024年3月21日)					
			会場 (部屋名)	司会・座長	
12:10 - 12:30	受付		2階 おどりば		
12:40 - 12:45	開会挨拶	鈴木 俊一 (実行委員会委員長・東京大学・上席研究員)		田川明広	
12:45 - 12:50	来賓挨拶	鈴木 顕 (文部科学省 研究開発局 原子力課 放射性廃棄物 企画室長)	人会議主	(原子力機構)	
13:00 - 15:10	研究発表:オーラル				
	(発表10分、質疑5分)	セッション1 発表8件:燃料デブリ取り出し・廃止措置関連 技術部門	視聴覚室	宇埜正美 (福井大学)	
		セッション2 発表8件:燃料デブリ・放射性廃棄物の処理・ 処分技術部門	研修室 2	出光一哉 (東北大学)	
		セッション3 発表8件:計測・分析技術部門	研修室 3	小原徹 (東京工業大学)	
15:00 - 16:00	研究発表:ポスター		大会議室		
16:00 - 17:00	企業ブース	企業ブースは学生セッションと並列で終日(13:00- 17:00)実施します。 ※.16:00-17:00は企業ブースのみ実施。	2階 おどりば		
17:00 - 17:45	移動・休憩				
17:45 - 19:30	表彰式 (懇親会)	堂崎 浩二 (表彰委員会委員長・東北大教授)	ホテル蓬人館	宇佐美博士 (原子力機構)	

<u>全体プログラム(2024年3月22日)</u>

			会場 (部屋名)	司会・座長
9:20 - 10:05	招待講演	吉澤 厚文 (長岡技術科学大学・教授)	大会議室	鈴木俊一 (東京大学)
10:05 - 10:20	会場準備・休憩	事務局	大会議室	
10:20 - 11:20	パネルディスカッション	横山諒(東京大学・D3)、野上光博(東北大学・助 手)、植村健朗(JAEA)、佐々木和仁(東京電力)、 小山伸也(日立GE)	大会議室	渡邉豊 (東北大学)
11:20 - 11:25	閉会挨拶	宇埜 正美 (実行委員会副委員長・福井大教授)	大会議室	宇埜正美 (福井大学)

3. 学生発表(オーラル)

3.1 セッション1

(燃料デブリ取り出し・廃止措置関連技術部門)

This is a blank page.

3.1.1 廃炉創造ロボコンにおける高所壁面除染ロボットの開発 ~通信ケーブル巻取ロボット~

小山工業高等専門学校	宮山	昇太郎	Shotaro MIYAYAMA
小山工業高等専門学校	田中	昭雄	Akio TANAKA

1. はじめに

毎年、高専生を対象として実際の廃炉作業を想定した 廃炉創造ロボコンが開催されている[1]。昨年の第8回大 会では遠隔有線操作による高所除染作業ロボットの開発 である。有線操作の問題点として、通信ケーブルが他の障 害物と接触し、過剰な張力が加わって亀裂や断線等のト ラブルが考えられる。これらの問題の解決法として除染 作業ロボットの他に通信ケーブルの巻取り専用のロボッ トが考えられる。

本研究では有線遠隔操作による除染作業において、 ケーブル操作に特化した通信ケーブル巻取ロボットを開 発し、除染作業ロボットと同時使用により作業の効率化 を検証することを目的とする。

2. 通信ケーブル自動巻取ロボットの構成

Fig.1 は通信ケーブル巻取ロボットの外観を示す。サイ ズは奥行き 680mm×幅 450mm×高さ 920mm、全重量は 20kg である。ロボットは、①台車部、②制御部、③巻取 ドラムの 3 つの部分から構成される。①台車部の移動機 構は、原子炉建屋内のスロープやグレーティング等の突 起物を走破するためクローラを用いた。ケーブル巻取り には、巻取ドラムに巻かれたケーブル弛み防止のため水 平送出ローラを搭載した。それぞれの回転軸はモータの 回転軸からワンウェイベアリングを介して回転する。 Fig.2 はケーブル巻取時の回転軸の状態を示す。巻取ドラ



Fig.1 Communication cable winding robot

ム軸のワンウェイベアリングはロックされ、ケーブルは 巻取られる。一方、水平送出ローラ軸のワンウェイベアリ ングはフリー回転となりケーブル弛み防止のストッパー となる。制御用マイコンは Raspberry Pi4 を使用し、制御 信号の受信、モータ制御および⑥上部確認カメラの映像 を操作用 PC へ送信する。



Fig.2 State of rotating shaft during cable winding

3. 動作性能

巻取ロボットの前進、後進の速度は共に約 0.75 m/s で あり、除染作業ロボットの移動速度 0.4m/s より速く、除 染作業ロボットに追従可能である。ケーブル送出・巻取速 度は、両速度とも約 0.4 m/s である。競技では除染作業ロ ボットと巻取ロボット間の距離は最大 20 m である。この 長さを連続で巻取った場合、50 秒で巻き上げることがで きる。競技本番の制限時間 10 分に対し、作業時間は8 分 30 秒であった。巻取ロボットの使用により除染作業ロ ボットの移動とケーブル巻取りの同時操作により作業時 間の短縮につながった。

4. まとめ

除染作業ロボットの開発を通して原子炉建屋内の高線 量エリアにおける放射線保護対策や遠隔技術について理 解を深めることができた。今後の課題として、ケーブル送 り出し時・巻き取り時における正確なケーブル長さや張 力をリアルタイムで計測することによって、ケーブル損 傷を未然に防止する機能を搭載する等の改良を加えたい。

参考文献

[1] 第8回廃炉創造ロボコン実施要項:廃止措置人材育成 高等連携協議会

3.1.2 廃炉創造ロボコンにおける高所壁面除染ロボットの開発 ~多段垂直アーム高所壁面除染ロボット~

小山工業高等専門学校	佐藤	佑海	Yuma SATO
小山工業高等専門学校	田中	昭雄	Akio TANAKA

1. はじめに

福島第一原子力発電所の廃炉作業は今後も長期的に継続されることから廃炉に関する多くの技術者が必要とされている。このような状況を踏まえ、高専生を対象に廃炉作業へ関心を持ってもらうためのロボット開発競技会として、2016年から廃炉創造ロボコンが開催されている。この競技では、実際の廃炉現場を想定した競技課題が設定され、ロボットの実用性が重視される。

本研究では第8回廃炉創造ロボコンの競技課題として、 原子炉建屋内の高所壁面における除染作業を行う遠隔操 作ロボットの開発を目的とする[1]。

2. 第8回廃炉創造ロボコンの競技課題

Fig. 1 は競技フィールドおよび除染作業ロボットの移動経路を示す。ロボットはスタートエリアからスロープ (幅 2000mm、最大斜度 15°)、およびグレーティング(縦 1200mm×横 1200mm×高さ 100mm)を通過し、除染壁(幅 1091mm×最大高さ 2700mm)まで移動する。次に壁面の 除染作業を行う。ただし、この除染作業とは壁面上の模造 紙をペン(ペン先幅 20mm)でインクを塗布する作業とな る。実際の除染作業ではペンの代わりにウォータージェ ット等の専用器具が使用される。除染完了後、ロボットは スタートエリアへ戻り競技終了となる。競技時間は 10 分 である。ロボットの操縦方法は、原子炉建屋内を想定し有 線による遠隔操作を用いる。



Fig. 1 Competition field and robot's movement path

3. 除染作業ロボットの構成

Fig. 2 は除染作業ロボットを示す。サイズはスタート時、全長 910mm×全幅 840mm×全高 1000mm、除染作業時、 全高のみ最大展開サイズ 3150mm となる。重量は 29.0 kg である。ロボットは①二重クローラ、②アーム角度調整部、 ③多段垂直アーム、④水平スライドレール、⑤ペン除染部 から構成される。③多段垂直アームは動滑車を用いたワ イヤー巻取機構を用いた。④水平スライドレールは多段 垂直アームの先端部に固定され、このレールによってペ ン除染部は、垂直アームを中心に左右へ350mm移動でき る。⑤ペン除染部には振動モータが搭載されており、電動 ブラシのような仕組みで壁面の凹凸や細い隙間から除染 物質を掻き出すことを想定している。さらに暗所におい てロボットの位置や方向姿勢を認識する手段として、ボ ディの一部に蓄光塗料を塗布し、④水平スライドレール の左端に赤色、右端に緑色のLEDを設置した。これらの 補助灯は航空機の翼端灯を参考にしている。



Fig. 2 Decontamination work robot

4. まとめ

本研究では多段垂直アーム除染作業ロボットを開発した。競技本番では、壁面へのインク塗布を約2分、全体の作業時間は8分30秒であった。

今後の課題は、ロボット周囲の環境認識において映像 だけでなく則域センサ等を用いた障害物回避などの機能 を搭載し、安全を高めた遠隔操作システムへの改善を行 う予定である。

参考文献

[1] 第8回廃炉創造ロボコン実施要項:廃止措置人材育成 高等連携協議会

3.1.3 廃炉創造ロボコンにおける立体除染ロボットの製作

熊本高等専門学校

中川	岬	Misaki Nakagawa
堤を	后之介	Akinosuke Tsutsumi
黒木	和維	Kazui Kuroki
財津	太一	Zaitsu Taichi
志賀	俊介	Syunsuke Shiga
吉村	勇太朗	Yutaro Yoshimura
高倉	健一郎	Kenichiro Takakura

1. はじめに

2023 年 12 月に行われた第 8 回廃炉創造ロボコンの競 技課題は「原子炉建屋内高汚染エリアの立体除染」であり, 福島第一原子力発電所の現場で実際に活かされるアイデ アと技術、ロボット製作を期待されている^[1].

本コンテストでは、高さ2.7 m,幅約1.1 mの壁面上部 に設置された模造紙を除染対象とし、模造紙をペンで塗 りつぶすことを除染とする.また、除染対象までの移動及 び帰還をする必要があり、経路の途中に不整地(スロープ、 グレーチング)が設置されている.

本稿では、筆者らが製作した機体について報告する.

2. 製作した機体 "47 式洗車"

図 1(a)は筆者らが製作した機体 "47 式洗車"の外観で ある.機体は,遠隔操作での立体除染(高所壁面の除染) を目的とし,不整地移動のための足回り(クローラ),立体 除染を行う除染・昇降機構,移動時のケーブル排出・巻取 機構で構成されている.



(a) Initial state (b) decontamination state Fig.1 Overview of decontaminate robot

2.1 除染·昇降機構

除染時は、図1(b)に示すように、昇降機構で2.7mまで 展開し、除染機構のペンを左右に往復させながら上から 下へと模造紙を塗る動作を自動で行う.

また,除染・昇降機構を機体中心方向に12°傾けて設置 することにより,機体重心を中央下部に配置し,不整地走 行時の安定性を確保している.

2.2 ケーブル排出・巻取機構

電波干渉源が多く存在する廃炉環境において、安定した無線通信は困難である. そのため、有線通信が広く用いられているが、「ケーブルマネジメント」が重要な課題と考えた. 廃炉内でのケーブルの絡まりは、機体のスタックに繋がるため、対処が必須である.

本機体では、高いケーブルマネジメント性能を確保す るため、機体後部にケーブル排出・巻取機構を搭載した.

排出時には、2本のローラーでリールに巻き付けられた ケーブルを排出し、巻取時には、カムの回転により従動子 の往復運動を生み出す「トラバースカム」を応用し、巻取 位置を左右に移動させて満遍なくリールに巻き付ける (綾振り)機構を実現した.この機構により、移動時の機 体内でのケーブルの絡まりや詰まりを回避できた.

3. おわりに

本コンテストでは、ケーブル排出・巻取機構により、ケ ーブルの問題が発生せずに競技課題を達成できた.本機 体のアイデアが廃炉現場で使用されることを期待する.

参考文献

 廃止措置人材育成高専等連携協議会: "第 8 回廃炉創 造ロボコン 実施概要", pp.1-8(2023)

3.1.4 サブテラヘルツ波を用いたコンクリート中の 鉄筋健全性評価に関する基礎的研究

東北大学工学部	倉品	吏玖	Riku Kurashina
東北大学大学院工学研究科	小林	知大	Chihiro Kobayashi
東北大学大学院工学研究科 准教授 博士(工学)	西脇	智哉	Tomoya Nishiwaki
日本工業大学建築学部 准教授 博士(工学)	田中	章夫	Akio Tanaka

1. はじめに

RC 構造物の適切な維持・補修には、内部鉄筋の状態を 把握する手法が必要とされるが、電磁波レーダ法等の既 往の手法には接触を要するものが多く、原子力発電所の 建屋のような接近が困難な構造物への適用に課題がある。

ここでは、コンクリートへの透過性から内部性状診断 に大きな可能性を持つ、サブテラヘルツ波と呼ばれる周 波数が約 0.03~0.3 THz の電磁波^{III}を用いた非破壊検査手 法を提案する。サブテラヘルツ波を用いた非接触でのコ ンクリート内部の鉄筋腐食の検出に向けた基礎的な検討 として、腐食鋼材を対象とした測定を行った。

2. サブテラヘルツ波を用いた測定

本研究で用いた測定系を Fig.1 に示す。試験体に対し斜めにサブテラヘルツ波を照射し、試験体表面からの反射波の強度を検出した。使用する周波数は 20~50 GHz とし、0.2 GHz ずつ変化させながら発振した。腐食試験体は大きさ 100 × 50 mm、厚さ 1 mm の平鋼板を 15 %過酸化水素水の噴霧と乾湿繰り返しにより表面を 0~7 週間腐食させて作製した。内部鋼材試験体は、上記の操作で作製した腐食試験体 (0、3、6 週)を使用し、腐食面を覆うようにコンクリートを打込み作製した。大きさは 100 × 100 mm、かぶり厚さは 10、20、30 mm に調整し、90 °C、1 日間の条件で乾燥させて測定を行った。



Fig.1 Measurement system







腐食期間の増加に応じた周波数毎の反射強度変化率の 推移を Fig.2 に示す。試験体の腐食期間が長くなるに従っ て反射強度が低下し、7 週の試験体は約 10~20%の低下を 確認した。

内部鋼材試験体の変化率の結果をFig.3 に示す。かぶり 厚さ10mm、42.6 GHz にて顕著なスペクトルのピークを 確認した。また、3週に比べ、6週のピーク位置における 変化率が大きくなったことから、変化率におけるピーク 位置の反射強度に注目することで、コンクリート中の鋼 材腐食を判別できる可能性が示唆された。

謝辞

本研究は、JAEA 英知を結集した原子力科学技術・人材 育成事業 JP JA 21 P 21458909 の助成を受け行ったもので ある。ここに記し深謝する。

本発表は、コンクリート工学年次大会 2024(松山) (2024 年6月 26-28日) で発表予定の内容の一部である。

参考文献

[1] 原星海ら:サブテラヘルツ反射波を用いた非破壊検査
 手法の開発に関する基礎的検討、コンクリート工学年
 次論文集、44(1)、1408–1413、2022



Fig.3 Change-ratio in reflection intensity of corroded steel inside concrete

3.1.5 Development of the electrical spray charging system for aerosol control in Fukushima Daichi decommissioning

Dept. Nucl. Eng. Mgmt., The University of Tokyo Nucl. Pro. Sch., The University of Tokyo Nucl. Pro. Sch., The University of Tokyo Dept. Nucl. Eng. Mgmt., The University of Tokyo

1. Introduction

During the 1F decommissioning, the debris should be cut into pieces for retrieval [1]. However, radioactive submicron aerosol particles (APs) will generate during this process, which are difficult to be removed by traditional spray method [2]. Electrocharging droplets is useful to improve their AP collection [3]. Thus, a series of spray-charging experiments are conducted in our UTARTS facility. Brass ring electrodes with different diameters are designed and studied.

2. Experimental

As shown in Fig. 1, UTARTS facility is a SS cylindrical vessel with 3.92 m³ in volume. Spray water is injected from a nozzle (GG-30) at 2 L/min. The electrodes are brass rings with distinct inner diameters (D, 25~200 mm). Electrode is connected to high voltage power supply (V, -0~-30kV) and placed near the nozzle outlet with variable distance (L_{en} , 20~50 mm) to charge the droplets with induction. ZrO₂ APs are used. Welas3000 is used for AP measurement. Totally, 18 experimental cases are performed at room temperature and atmospheric pressure. Fig. 2 illustrates the effect of voltage. Increased voltage improves removal efficiency, but benefits diminish at higher voltages due to the enhanced droplet deposition on the electrodes, corona discharge and space charging. Figs. 3 show the effects of charged mist. Aerosol removal efficiency is improved when water mist is



Fig.1 UTARTS facility [4]

Ruicong XU Avadhesh Kumar SHARMA Shuichiro MIWA Shunichi SUZUKI



Fig.3 Effect of charged mist

pre-injected due to the enhanced aerosol-mist agglomeration, which enlarged the aerosol sizes before spray activation. The effect of the mist charging on improving the aerosol removal efficiency is confirmed because of the enhancement of aerosolmist agglomeration under the help of additional Coulomb force.

3. Conclusion

To improve the AP removal efficiency in 1F decommissioning, we developed electrodes to charge the spray droplets and mist. Valuable understanding of the important parametric effects is attained, which will be helpful for the safe 1F decommissioning.

References

- [1] Sharma A.K., et al., J. Aerosol Sci. 177 (2024) 106329.
- [2] Greenfield S.M. J. Atmos. Sci. 14(2) (1957) 115-125.
- [3] Sharma A.K., et al., J. Aerosol Sci. 174 (2023) 106254.
- [4] Xu R., et al., Nucl. Eng. Des. 419 (2024) 112960.

3.1.6 五ホウ酸ナトリウム添加を想定した環境における 炭素鋼のSCC感受性および進展性に関する研究

東北大学大学院工学研究科	小沼	佳月	Katsuki ONUMA
東北大学大学院工学研究科	阿部	博志	Hiroshi ABE
東北大学大学院工学研究科	渡邉	豊	Yutaka WATANABE
東京電力ホールディングス	深谷	祐一	Yuichi FUKAYA

1. 緒言

1F では燃料デブリの十分な未臨界深度を確保する ため、中性子吸収作用を有する五ホウ酸ナトリウム の冷却水への添加が検討されている。PCV の主材で ある炭素鋼は五ホウ酸ナトリウム溶液中で不働態化 することが報告されており^{II}、PCV の健全性維持の観 点から、同環境における炭素鋼の応力腐食割れ (SCC: Stress Corrosion Cracking) 感受性の十分な検討 が必要である。本研究では低ひずみ速度試験 (SSRT: Slow Strain Rate Testing) と SCC 進展試験を行い、五 ホウ酸ナトリウム溶液中の炭素鋼の SCC 感受性およ び進展性を評価した。

2. 実験方法

2.1 SCC 感受性評価試験 (SSRT)

供試材は Mark II 型 PCV 用鋼材 SA738B とし、こ れをゲージ部寸法が 2 mm × 4 mm × 20 mm となる平 板引張試験片に加工した。試験中の溶液は温度 30°C ±1°C に維持し、窒素を通気し続けた。ひずみ速度 1.1 × 10⁻⁷/s で試験時間は計算上ひずみ 10%に到達する 257h とした。試験後の試験片は長手方向に切断して 断面を SEM で観察し、1 μ m 以上の深さのき裂が存 在する場合、SCC 感受性があると判断した。

2.2 SCC 進展試験

0.5T-CT 試験片を採用した。溶液は温度 30°C±1°C、 窒素脱気環境とした。五ホウ酸ナトリウム濃度およ び電位は SSRT 結果からき裂数密度が最も高く、平均 き裂深さが最も大きかった条件の 4000ppm as B、-0.50 V_{SSE} とした。試験開始時の応力拡大係数は $K_I = 27.4$ MPa·m^{1/2} とした。試験中のき裂進展量は直流電位差 (DCPD: Direct Current Potential Drop) 法によってモニ タリングした。

3. 結果および考察

3.1 SCC 感受性評価試験(SSRT)

五ホウ酸ナトリウム濃度と電位をパラメータとし て SCC 感受性をまとめたグラフを Fig.1 に示す。グ ラフには動電位アノード分極曲線のカラースケール も示している。き裂が生じた条件はすべて動電位ア ノード分極曲線における活性態-不働態遷移域に対応 していた。試験片断面をエッチングして観察すると 割れは粒界に沿って進展していた。またき裂先端周 囲で μm オーダーの厚い酸化皮膜は形成されておら ず、進展機構は APC (Active Path Corrosion) 機構が支 配的である可能性が示唆された。



Fig.1 SCC susceptibility of carbon steel in sodium pentaborate solution (O: No SCC, X: SCC)

3.2 SCC 進展試験

き裂進展速度は $K_I = 28.4$ MPa·m^{1/2}にて 5.92 × 10⁻¹² m/s であった。この値は BWRVIP-233 で報告されて いる通常炉内水質環境、[Cl⁻] < 3ppbの低合金鋼の SCC 速度線図で示される値より 1 桁小さく、本試験条件 における炭素鋼の進展性は低いと判断した。

参考文献

 Y. Fukaya and Y. Watanabe: J. Nucl. Mater., 498, pp. 159-168 (2018).

3.1.7 Automatic Selection of Observation Positions for Rail-Mounted Robots to Assist Teleoperation in Nuclear Decommissioning Scenarios

The University of Tokyo The University of Tokyo

```
劉子萱
中島 慎介
小松廉
松日楽 信人
淺間一
安琪
山下淳
```

Zixuan LIU Shinsuke NAKASHIMA Ren KOMATSU Nobuto MATSUHIRA Hajime ASAMA Qi AN Atsushi YAMASHITA

as shown in Fig. 1 is then used where the robot arm is controlled by keyboard, while viewpoint selection is executed repeatedly. Real-time change in selection result is observed where the presented viewpoint moves to avoid occlusion by the robot arm.



Fig.1 Selection (light green) changing with robot Acknowledgements

Similar content is presented at the 29th Robotics Symposia on March 6th, 2024. A part of this study is financially supported by JAEA Nuclear Energy S&T and Human Resource Development Project Grant Number JPJA19H19210047.

References

- Maruyama T, Aburadani A, Takeda N, Kakudate S, Nakahira M, Tesini A. Robot vision system R&D for ITER blanket remote-handling system. Fusion Engineering and Design. 2014;89(9-10):2404-8.
- [2] McKee GT, Brooks BG, Schenker PS. Human-robot interaction for intelligent assisted viewing during teleoperation. In: Sprague RH Jr, editors. Proceedings of the 36th Annual Hawaii International Conference on System Sciences; 2003. IEEE; 2003. [10 p.].

1. Introduction

It is shown that constantly providing operators with elevated views can improve teleoperation in nuclear decommission. To manipulate equipment inside the PCV inaccessible to humans, rail-mounted robots are being developed as one solution ⁽¹⁾. In order for operators to control their robots in an efficient fashion, it is necessary to automatically provide views, and developments have taken place in algorithms to achieve such an effect ⁽²⁾. These studies, however, focus on occlusions caused by manipulated objects instead of the robot itself. The objective of this research is to use rail-mounted observation robots to automatically provide a viewpoint inside an unknown unmanned environment to observe target objects of teleoperation. This viewpoint shall be able to respond to the occurrence of occlusion by robot.

2. Proposed Method and Simulation

Structure from Motion (SfM) is uesd to create a mesh model of the working environment along with viewpoint candidates along the rail. After integrating the model of a moving robot arm to create occlusions, rendering pipeline is used to eliminate bad candidates by the size of the target object rendered from each candidate viewpoint. Remaining ones are evaluated by how far they are away from their eliminated counterparts. To test the proposed method, footage is taken using a camera moving in a path resembling a rail, looking down at an environment created with various objects. Model and viewpoint coordinates are then obtained with SfM and imported into simulation program for rendering pipeline and viewpoint selection. Interactive interface

3.1.8 ジオポリマーを用いた格納容器下部開口部の閉塞止水に関する研究

東京大学	里見	穂	Sui SATOMI
東京大学	鈴木	俊一	Shunichi SUZUKI

1. 緒言

福島第一原子力発電所の廃炉作業を、放射性物質の 移動がない安定した状態で進めるにあたり、原子炉格 納容器内ドライウェル下部から地下階方向への流水を 止水することは重要な役割を果たす。注水量減少や汚 染水の範囲限定、冠水状態でのデブリ取り出しを可能 にする等の効果が想定されるためである。本研究はセ メント系材料であるジオポリマーを用いて、ドライウ ェルとベント管の接続構造であるジェットデフレクタ 一開口部を止水する工法の確立に着目する。ジオポリ マーの注入固化による閉塞・止水試験を実施し、実機施 工への応用を想定した性能評価を行う。



図1 ドライウェル下部止水による安定化機能

2. メッシュ閉塞試験

幅約2cmの垂直開口に対し、開口上にメッシュを設置 した状態でジオポリマーを注入した。その後容器内を 0.1[MPa]まで加圧し、開口からの漏出量によってメッシュ を設置した場合のジオポリマー開口閉塞性能を評価した。 使用したメッシュ目は0.5, 1, 5mmの3種類である。ジオ ポリマーには粒径の異なる3種類の骨材とロックウール を添加し、配合量の組み合わせによる閉塞性能や流動性 変化を確認した。

試験の結果、スラリー底部に沈殿してメッシュに引っ かかる粒径を有する骨材と、微小繊維が拡散するロック ウールを組み合わせて添加したジオポリマーが、φ5mm のメッシュに対しても漏出が少なく、有意な開口閉塞性 能を示すことがわかった。

3. 模擬ジェットデフレクター止水試験

実機のジェットデフレクター開口部を 1/6 サイズで模擬し、水が 10L/min で循環する試験水槽にジオポリマー を注入することで、実環境を想定した開口部の止水可能 性を評価した。開口縮小のため、前もって開口の周囲に同 ージオポリマーが入った土嚢袋を設置した。水冷と添加 材により粘度を調整したジオポリマー約 400L を注入し た結果、ジオポリマーが積み上がるにつれてベント管側 への水・ジオポリマー流出量が減少し、最終的に高さ 50cm 程度の開口を閉塞・止水した。固化体を切断した結 果、強度低下や漏出につながる割れは発生せず、土嚢袋は ジオポリマー内で固化接着していることが確認された。



図2 ジオポリマーによる止水・固化体の切断面

4.結言

ジオポリマーの注入による止水技術は、加圧環境・400L 規模の水中環境で開口を閉塞固化できる可能性が示され た。今後実機への適用を想定するにあたり、適切な閉塞止 水性能を有するジオポリマーの条件選定や補助材の併用 に加え、混錬から注入までの全工程を完了するための攪 拌機器や流動性を維持する注入方法といった工法の評価 選択が求められる。

3. 学生発表(オーラル)

3.2 セッション2

(燃料デブリ・放射性廃棄物の処理・処分技術部門)

This is a blank page.

3.2.1 U308-Fe203系燃料デブリの相関係の評価

所属	東北大学	岩原	聖樹	Toshiki IWAHARA
所属	東北大学	秋山	大輔	Daisuke AKIYAMA
所属	東北大学	桐島	陽	Akira KIRISHIMA

1. 緒言

東京電力福島第一原子力発電所事故では燃料が溶融し、 被覆管や制御棒、炉心支持構造物と共に燃料デブリを形成していると考えられている。このうち燃料成分である UO₂と制御棒被覆管や炉心支持構造物由来のFe合金が反応した可能性がある。これまでの格納容器内部調査において(U, Fe)O₂粒子の存在が確認されている[1]が、U-Fe-O系高温反応の基礎研究データは少なく、熱力学状態図も定まっていない[2-3]。今後行われる核燃料デブリの取り出しや分析、保管、処分の際、デブリを安全に取り扱い、 事故進展の推定をするために、U-Fe-O系の凝固過程における相関係を理解することが重要である。そこで本研究では、U₃O₈とFe₂O₃の混合物の示差熱熱重量同時測定法(TG-DTA)により、U₃O₈-Fe₂O₃擬二元系の凝固反応プロ

2. 実験

セスについて検討した。

U₃O₈粉末と α -Fe₂O₃粉末の混合試料を作成し、TG-DTA による熱分析を行った。1450 ℃から 1200 ℃まで 10 ℃ /min の降温過程において測定を行い、N₂ガスと乾燥空気 の混合により酸素濃度を制御した。

3. 結果·考察

TG-DTA により酸素濃度が低下すると凝固温度が低下 し、その影響はUリッチな組成で大きく、Feリッチな組 成では小さいことが明らかとなった(図1)。この凝固反 応は重量が増加したことから酸化を伴う反応とみられ、 液相におけるUとFeの平均酸化数が固相と比較して低 くなっており、酸素濃度の低下に応じてより高い酸化状 態である固相の安定領域が低温側に縮小したと考えられ る。また、酸素濃度によらずFeリッチな領域における凝 固温度はUリッチな領域に比べ低くなっていた(図1)。 U₃O₈-Fe₂O₃ 擬二元系では、U 酸化物の不定比性により固 相の酸化状態が変化する可能性や、FeUO₄ 相が生成する 可能性があり[4]、凝固反応が U-Fe 間の組成比により異な る可能性が示唆された。



図1 U3O8-Fe2O3 擬二元系における反応温度(20%O2、8%O2)

参考文献

- 東京電力ホールディングス株式会社: 廃炉・汚染水対 策チーム会合/事務局会議(第84回),資料3-3,1~
 3 号機格納容器内部調査関連サンプル等の分析結果.
 11月26日 (2020). https://www.meti.go.jp/earthquake/nu clear/decommissioning/committee/osensuitaisakuteam/202 0/11/3-3-4.pdf (accessed 2023-06-30).
- [2] Evans, W. D. J., White J.: Equilibrium Relationships in the System UO₂-Fe₃O₄-O. *Trans. Brit. Ceram. Soc.* 63 (12), pp.705-724 (1964).
- [3] Riley B.: The UO₂-Fe₂O₃ and PuO₂-Fe₂O₃ System in Air. *Trans. Am. Nucl. Soc.* **12**, pp.543-544 (1969).
- [4] Petrov, Yu. B., et al.: Phase Equilibria during Crystallization of Melts in the Uranium Oxide-Iron Oxide System in Air. *Glass. Phys. Chem.* **35** (3), pp.298-307 (2009).

3.2.2 Cs汚染コンクリートに対する浸透・溶出挙動の研究 -Cs 汚染コンクリートの分配係数の時間変化-

東京都市大学	川名 芳佳	Yoshika KAWANA
東京都市大学	近藤 幸祐	Kousuke KONDO
東京都市大学	佐藤 勇	Isamu SATO
東京都市大学	栗原 哲彦	Norihiko KURIHARA

1. 緒言

東日本大震災により福島第一原子力発電所(以下 IF) にて事故が発生した。これにより原子炉建屋が放射能レベルの高いCsに汚染されている。このことから、原子炉 建屋の構造材であるコンクリートに着目し、コンクリートにおけるCsの分配係数を評価した。特に事故から年月 が経ち、コンクリートの浸水期間が長期化していること から、分配係数の時間変化と濃度平衡に至るまでの期間 についても評価した。なお、本実験では収着試験後のCs 溶液の濃度測定に原子吸光光度計を用いた。

2. 実験方法

実験には当大学・都市工学科・栗原研究室にて作製した モルタル試料(普通ポルトランドセメント、W/C=0.37) を粉砕し、ふるいにかけて粒径を 150µm 以上 1mm 以下 に揃えたものを用いた。これを CsOH 水溶液と共に収着 試験を実施し、遠心分離後上澄みの溶液を原子吸光光度 計にて濃度測定した。まず、本実験ではより正確な分配係 数を測定するため予備試験を実施し、本試験で使用する 溶液濃度と固液比を決定した。予備試験では 10⁻¹M から 10⁴M まで7水準のCsOH 水溶液にて収着試験を実施し、 平衡濃度(C_m)/初期濃度(C₀)が0.5に最も近い水準の 濃度に決定した。本試験では予備試験にて決定した条件 を元に5分ごと、15分ごと、7日ごとと振とう時間を変 化させ、収着試験を実施した。また、1Fのコンクリート は高温に晒された可能性が推察されるため、加熱炉にて 加熱炉にて 350°C、500°C、650°C、800°Cの条件でモルタ ル試料を加熱し、これを用いて分配係数の過熱依存性を 評価した。さらに Cs の浸透・溶出実験を実施して、中性 子放射化分析による深さ方向の Cs 濃度分布を評価した。

3. 結果·考察

分配係数とは、本研究ではコンクリートへのCsの収着 しやすさを示す指標であり、この値が大きいほどコンク リートがCsを収着しやすいことが分かる。適正初期濃度 は本試験にて分配係数の増減が観察しやすいようC_{eq}(平 衡濃度)/C₀(初期濃度)が中間値の0.5となる濃度とし た。よってFig.1より、5×10³Mを適正初期濃度と決定し た。なおこの値を元に適正固液比を算出し、溶液量を 15mLとした。その後本試験としてC_{eq}/C₀を0.3、0.5、0.7 と仮定した際の試料量を算出し、それぞれで収着試験を 実施した。その結果Fig.2より、5分ごとの条件にて時間 経過ごとに濃度が増加する様子を観察できた。このこと からモルタルのCs 収着速度は非常に早く、早い段階で平 衡濃度に達することが示唆された。また、モルタル加熱温 度が高いほど濃度が低減する様子を観察できた。これは 中性子放射化分析によって加熱温度が高いほど Cs の吸 着サイトが減少し、収着量が低減すると判明したため、妥 当な結果が得られたと推察される。分配係数は大雑把な 評価に使用されることも多いが、きちんと条件を定めれ ば濃度以外の条件で値が変化しにくく、十分正式な評価 に相応しい係数であると推察される。このことは IF 廃止 措置においてコンクリート製の低レベル放射性廃棄物表 面のCs 濃度を予測する際に役立つものと期待される。



Fig.1 予備試験 Ceq/Co 算出結果



Fig.2 本試験(5分ごと) C_{eq}比較

2023 年春の年会(3月21日)で同一内容を発表 予定

参考文献

[1] 三浦拓也「失敗しない土壌の吸着試験方法の提案と適用性評価」 (2022 年 17 巻 3 号 p. 331-339)

3.2.3 Investigation of molten metal spreading behavior on substrate with different surface roughness

東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻 東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻 東京大学大学院工学系研究科総合研究機構 Yihua XU Ryo Yokoyama Shunichi Suzuki

1. Introduction

The Fukushima Daiichi Nuclear Power Station (1F) underwent a severe accident in 2011 and has been under decommissioning. Understanding the condition of the fuel debris and fission products within the reactors is crucial for this decommissioning process. The spreading of the mixture of molten core material and structure materials (often referred to as corium) over the containment floor, is one of the processes that largely influence the fuel debris and fission products distribution. Although several research projects related to corium spreading have been carried out for several decades, the corium spreading accompanying the downward jet flow scenario which is crucial phenomenon at 1F has not been well investigated yet. Thus, these studies[1][2] focus on corium spreading following a downward impinging jet. However, smooth-surfaced metal plates are widely applied as substrate while the substrate in 1F is concrete which has porous media, creating rough surface condition. The specific impact of substrate roughness on corium behavior remains inadequately explored. Addressing this gap, the objective of this research is to reveal the influence of substrate roughness on the corium spreading behavior and help to predict the corium distribution after spreading more accurately.

2. Experiment and results

The experiment is conducted using Wood's metal as corium simulant, different sandpapers and concretes as substrate. The sandpapers have different grit size range from #80 (quite rough) to #3000 (quiet smooth). Experiment facility is shown in Fig.1. During the experiment, corium simulant with a total mass of 200g is heated in the vessel till 150°C then released from a 5mm nozzle onto the substrate at room temperature put on the height adjuster. The height between the upper surface of substrate and the nozzle is set to be 25cm. The whole process of spreading is recorded by





2 cameras from a side view and from top. The recorded video undergoes image processing, from which the spreading area evolution and other data are obtained.

Fig. 2 shows the spreading area evolution on different sandpapers. The spreading area evolutions are similar to each other under same experimental condition, indicating a relatively good repeatability within \pm 10%. Spreading area increases monotonically until the spreading terminates. Besides, the final spreading area is generally smaller for the spreading on a rougher surface. Based on the data collected, a predictive model of spreading area considering the substrate roughness and the outlet conditions is proposed.

3. Conclusion

To better understand the condition of fuel debris and fission products distribution in 1F, spreading experiments of molten metal in form of impinging jet are performed on different substrate. The influence of substrate roughness on corium spreading behavior is modeled, which will be helpful for the safe 1F decommissioning.

Reference

- Yokoyama, R., Suzuki, S., Okamoto, K., and Harada, M., 2020, "Scale Effect of Amount of Molten Corium and Outlet Diameters on Corium Spreading," Progress in Nuclear Energy, **130**, p. 103535.
- [2] Sahboun, N., Miwa, S., Sawa, K., Yamamoto, Y., Watanabe, Y., and Ito, T., 2020, "A Molten Metal Jet Impingement on a Flat Spreading Surface," Journal of Nuclear Science and Technology, 57(9), pp. 1111–1120.



3.2.4 放射性ニオブのシリカゲルによる分別処理と分析化学的応用

福島大学	長沼	和希	Kazuki NAGANUMA
原子力機構	松枝	誠	Makoto MATSUEDA
福島大学	柳澤	華代	Kayo YANAGISAWA
ジーエルサイエンス	及川	博士	Oikawa HIROSHI
ジーエルサイエンス	橋本	淳一	Hashimoto ZYUNICHI
福島大学	高貝	慶隆	Yoshitaka TAKAGAI

1. 緒言

福島第一原子力発電所における廃棄物の処理方法とし て、ガラス固化体後の地層処分などがある。その際、放 射能レベルでの分別や半減期での分別処理は、廃棄物の 減容につながる。

放射性ニオブの一つである ⁹⁴Nb は、β線 (472 keV) お よび γ線 (703 keV および 871 keV) を放出しつつ,安定 同位体の ⁹⁴Mo へと壊変する。 ⁹⁴Nb は、安定同位体の ⁹³Nb が (n, γ) 反応や ²³⁵U などといった核燃料物質の核分裂 において生成される。そして、半減期が 2.03 × 10⁴年と 長く、長期保管となるため、⁹⁴Nb の分別は重要である。

シリカゲルは、ガラスと同様の成分であり、吸着した ものをそのままガラス固化が容易であると考えられる。 本研究では、シリカゲルによる Nb の固相抽出を行い、吸 着挙動を調査した。

長期保管において、安全管理のためのモニタリングは 必要である。⁹⁴Nbの分析方法は、Ge半導体検出器による ガンマ線測定や誘導結合プラズマ質量分析計(ICP-MS) による質量分析が挙げられる。しかし、いずれの分析方 法においても妨害元素との分離は必要である。本研究で は、シリカゲルを用いた分離測定への応用も行った。

2. 実験

Nb のシリカゲルへの吸着実験は、カラム法で調査した。 シリカゲルは、ジーエルサイエンス製 D-150-120A(粒径 150 μm、細孔 12 nm、表面積 320 m² g⁻¹)を使用した。 カラムに 67 元素の混合溶液を吸着させ、吸着の選択性を 調査した。塩酸、硝酸濃度を調整した Nb を含む溶液を吸 着させ、酸濃度による吸着への影響を評価した。Nb を吸 着させたシリカゲルにシュウ酸、ギ酸、酢酸、マロン酸、 マレイン酸、クエン酸溶液を通液し、溶出試験をした。 各通液試料は、ICP-MS で測定し、吸着率、溶出率算出した。またシリカゲル D-150-60A(粒径 150 μ m、細孔 12 nm、表面積 650 m²g⁻¹)と EP-DM-50-60A(粒径 50 μ m、細孔 6 nm、表面積 650 m²g⁻¹)を使用し、粒径や細孔の違いによる吸着用量への影響を調査した。

241 Bq の⁹⁴Nb を環境水(河川水、井戸水、海水)にス パイクした試料をカラムに通液し吸着させ、次にシュウ 酸を通液し溶出させた。回収した溶液を Ge 半導体検出 器で測定し、回収率を算出した。

また、シリカゲルと ICP-MS を組み合わせた自動分析 システムを構築した。このシステムを用いて、先述と同 様の環境水に 50 ppb Nb をスパイクし、回収試験を行っ た。

3. 結果

67 元素の混合溶液を吸着させた際、Nb と Ta が選択的 に吸着された。酸濃度による Nb の吸着への影響では、塩 酸が 1-6 M、硝酸が 1-10 M の時に、吸着率が 90%以上を 示した。溶出試験では、シュウ酸により 102.1±0.4%溶出 された。しかし、他の酸での溶出率はいずれも 2.8%以下 であり、溶出しにくいことが分かった。液性が 1 M 塩酸 における D-150-120A と D-150-60A および EP-DM-50-60A の吸着容量は、それぞれ 1.5 mg g⁻¹, 2.9 mg g⁻¹, 2.8 mg g⁻¹ であった。そのため、Nb の吸着容量は表面積に依存する と考えられる。

河川水、井戸水、海水中でのスパイク回収率は、それ ぞれ 95.2%、101.0%、101.6%であり、⁹⁴Nb 分析へのシリ カゲルの応用が可能であると示唆された。

自動分析システムによる添加回収試験では、河川水、 井戸水、海水中での Nb のスパイク回収率は、それぞれ 93.6±3.5%、96.9±2.4%、105.6±0.4%であった。また、1 つの試料の測定時間は 30 分であった。

3.2.5 燃料デブリ収納缶での水素低減を目的とした触媒開発に係る研究 -γ線照射による水素発生対策添加剤機能評価-

東京都市大学	樽見	直樹	Naoki TARUMI
東京大学	野田	篤志	Atsushi NODA
東京都市大学	佐藤	勇	Isamu SATO
東京大学	鈴木	俊一	Shunichi SUZUKI

1. 緒言

福島第一原子力発電所事故で発生した燃料デブリはジ オポリマーで安定化させ、収納缶で輸送・保管されるこ とが提案されている[1]。ここで、水素の発生が課題の一 つとして挙げられる。対策として、水素低減材料の使用 を提案しており、効率的な適用方法の検討及び新たな材 料の開発という2つの観点から評価を実施した。

前年度の報告では、適用方法の検討として触媒の分散 状態の制御は可能であることを確認した。材料の開発で は、核分裂生成物の一種であり、再処理時に不溶解残渣 として溶け残る白金族合金[2]の直接利用を提案し、模擬 合金の水素低減機能を評価したところ、含有する Mo が 触媒機能の阻害をしていることが示唆された。

本研究ではジオポリマーへの適用位置を工夫した試料 及び模擬合金より Moの除去を試みた試料に対し、γ線照 射による水素発生対策添加剤の機能評価を実施した。

2. 実験方法

発生した水素は上面へ移行しながらジオポリマー内部 で再結合されることから、適用方法の工夫として、 AbOs-Pd 触媒をジオポリマー上部に傾斜をつけて階層型 に添加した。作製手順としては、添加剤を含まないブラ ンクジオポリマー及び触媒を 0.5wt%添加したジオポリマ ーの2種の比率を変更し、1層目に添加剤を加えていなブ ランクジオポリマーペーストを樹脂製のガラスアンプル に流し込み、気中で養生させた。4 時間後、2 層目に AbOs-Pd 触媒を添加したジオポリマーを流し込み、湿分 を保ちながら養生した。

自金族合金から Mo を除去する試みとして、模擬合金 に対して減圧下での加熱を実施した。熱力学の観点から 加熱条件を決定し、冶金学的観察にて評価した。また、 当該粉末試料をジオポリマーに 0.5wt%混合固化させ、1 週間の養生後にガラス容器に密封した。

それぞれのガラス容器に対し、アトックス技術開発センターにて⁶⁰Co-γ線源を用いて積算線量 3MGyのγ線照 射を実施した(図 1)。その後水上置換法にて水素をサンプリングしガスクロマトグラフィーで水素量を測定し、照 射量当たりの発生ガス量として G(H₂)値[mol/J]という指標 により水素低減量を比較した。

3. 結果 · 考察

上部に傾斜を付けた添加(階層型添加)では、一定の効 果があることが見られたが、全体に分散させたジオポリ マーではさらに1桁低く抑えられた。このことより触媒 を全体に分散させることが有用であると示された。しか しながら、ジオポリマーによる再結合や放射線分解の反 応が起こっている場所等についてより深く検討する必要 があり、放射線分解における水素の拡散経路や再結合後 の水の拡散(又は浸透)経路を評価する必要がある。

自金族合金の機能向上手法の結果として、少なくとも 表層の Mo の除去が可能であり、これに伴って試料表面 の形状が多孔質へ変化することが確認された。また、加 熱前と比較して、加熱後の G(H2) 値が低い値を示してお り、試料表面の多孔質化やそれに伴って生じる Pd の相 形成によって触媒機能を向上させていると考えられる。 したがって、白金族を触媒として使用する際は加熱によ る Mo の除去が有効であると確認された。

上記より、水素の発生の対応策として実施した効率的 な水素低減材料の適用方法の検討及び新たな材料の開発 は、燃料デブリをジオポリマーで安定化させ、収納缶で 輸送・保管する工法を進める一助となっていると考えら れる。これら研究の応用先として、原子力産業では、核 分裂生成物の有効利用という観点を含んでおり核燃料サ イクルの活性化や新たな燃料設計に発展させられると考 えられる。また、原子力産業外でも、材料の観点から見 た水素化社会への貢献や貴金属・鉄鋼といった冶金学・ 金属工学への応用、更には放射線場といった観点から航 空・宇宙工学への展開が期待できると考えられる。



Fig.1 Appearance of γ -ray irradiation examination

日本原子力学会 2024 年春の年会(3月 27日)で 一部同一内容を発表予定

参考文献

- [1] 鈴木俊一, et al, "ジオポリマーを活用した燃料デブリ取り出し 工法の提案,"日本保全学会第14回学術講演会要旨集,2017.
- [2] Kleykamp, H., 1985. The Chemical State of The Fission Products in Oxide Fuels. J. Nucl. Mater, 131, 221-246.

3.2.6 高アルカリ地下水流動場における セメント系バリアの見かけの成長速度の評価

東北大学	工学研究科	永井 翔	Sho NAGAI
東北大学	工学研究科	関 亜美	Tsugumi SEKI
東北大学	工学研究科	千田 太詩	Taiji CHIDA
東北大学	工学研究科	新堀 雄一	Yuichi NIIBORI

1. 緒言

福島第一原子力発電所(1F)の廃炉に伴い発生する 事故廃棄物は、段階的な取り出し、および安定保管・ 管理を経た後の取り扱いについて今後さらに議論を 要する。その取り扱いの一つのオプションとして、従 来の放射性廃棄物に準じた地下への埋設処分が挙げ られる。一方、セメントは、地下の処分場構築や廃棄 物の固化材として用いられ、1Fの廃炉を進める上で も有用な材料である。

地下水の豊富なわが国における地下でのセメント 利用により、処分場近傍の地下水のpHは一時的に12 ~13 程度となる。このような環境では岩盤からケイ 酸が溶出し、セメント由来の Ca と反応することで、 地下水の流路に Ca-Si 系水和物が生成する。本研究で は、Ca-Si 系水和物の析出による核種移行抑制効果に 着目し、Ca-Si 系水和物をセメント系バリアと位置づ けている。既報[1]では、花崗岩を組み込んだマイク ロフローセル(流量一定)による透水性変化を評価し た。これに続き本報告では、堆積岩の間隙を模擬した ケイ砂充填カラムを用いたオーバーフロー系(圧力勾 配一定)による透水性の変化を調べ、Ca-Si 系水和物の 見かけの成長速度を評価した。

2. 実験

流動実験では、充填部の長さが6cmとなるように 平均粒径430µmのケイ砂を充填したカラムに、オー バーフロー系により圧力勾配一定で4時間に亘る通 液を行った。通液する溶液はNaCl濃度0および600 mM、Ca濃度5mM、pH12とした。カラム出口にお ける体積流量から浸透率を求めるとともに、ICP-OES を用いて流出溶液中のCaおよびSi濃度を測定した。 また、Ca-Si系水和物の析出と浸透率の低下を関連付 けた評価モデルを得られた実験結果に適用し、Ca-Si 系水和物の見かけの成長速度定数k_r*を求めた。

3. 実験結果

図1は、流動実験により得られた浸透率の経時変

化(初期浸透率で正規化)と、評価モデルをフィッテ ィングした結果である。評価モデルでは、ケイ砂粒子 の溶解、および、固相表面への Ca-Si 系水和物の析出 による粒径変化を考慮し、Kozeny-Carman の式を用 いて無次元浸透率を算出した。(a)および(b)において 共に浸透率が低下していることから間隙が減少して いると考えられ、その効果は NaCl 濃度 600 mM の場 合に大きくなることが分かる。また、流出溶液中の Ca 濃度が低下し、Si がほぼ流出しなかったことから、 この間隙の減少は Ca-Si 系水和物の析出によると考 えられる。フィッティングにより得られた Ca-Si 系水 和物の見かけの成長速度定数k_r*は、NaCl濃度0mM で1.7×10⁻¹⁰ m/s、NaCl 濃度 600 mM で8.3×10⁻¹⁰ m/s となった。高 NaCl 濃度において見かけの成長速 度が大きいのは、Ca-Si 系水和物の凝集促進が浸透率 の低下に反映されるためと考えられる。



4. 結言

本研究では、地下の堆積岩中の流動場を模擬した 流動実験により、Ca-Si系水和物の析出に伴う浸透率 の変化を評価した。その結果、いずれの条件において も Ca-Si系水和物の生成により流路の透水性が低下 し、高 NaCl 濃度条件において一層顕著になった。こ れらより、実環境においても Ca-Si系水和物の析出が 地下水移流を低減させるセメント系バリアとして機 能し、核種移行が抑制される可能性が示された。

参考文献 /[1]永井ら, 第8回 NDEC 予稿集, p.15 (2023). 謝辞 本研究の一部は JSPS 科研費 JP21H04664 の成果で ある。ここに記して謝意を表す。

3.2.7 Basic study about dissolution Method of Simulated nuclear fuel debris by Thermochemical Conversion for Actinide Analysis

Affiliation	Nagaoka Univ. of Tech	Name
Affiliation	Tohoku Univ.	Name

ZHUORAN MA Tatsuya Suzuki Yoshiya Homma Kenji Konashi

1. Introduction

Fuel debris generated in severe nuclear accident (especially Fukushima Daiichi Nuclear Power Plants accident) contains nuclear fuel and core structural materials, and/or concrete materials. Thus, debris are difficult to dissolved into aqueous solutions. Analyses of actinides and several kinds of nuclides are required for planning of the effectual management of debris, and of the adequate decommissioning.^[11]. Now we have proposed that these substitutes are chemically converted into easily soluble substitutes by thermochemical reactions. Alkaline fusion method is considered to be a method that can efficiently dissolve nuclear fuel debris containing uranium-zirconium solid solutions. The dissolution behavior of simulated nuclear fuel debris in nitric acid and hydrochloric acid under the alkali fusion method was investigated in the present work.

2. Experiment method and results

2.1 Experiment method

Our used simulated nuclear fuel debris were sintered at 1700° C for 4hours with Ar - 4 % H₂ condition. The molar ratio of U, Zr, Ca in simulated debris is 0.45, 0.45, 0.10.

In order to realize the pulverization of the simulated debris pellet, the REDOX experiment of pellet was carried out by using Electrical Furnace with O_2 or Ar - 4 % H₂ condition.

The powder mixed with Na_2O_2 with mass ratio of 1 to 10 respectively. After heating at 650°C for 1 hour in the 20 ml aluminum crucible, the product were dissolved with 6mol/l nitric acid or 6mol/l hydrochloric acid. After pressure filtration, weigh the dried filter paper to determine the quality of the filter residue.

U:Zr:Ca	Sintering	Ovidation	Paduation
(molar ratio)	Condition	Oxidation	Reduction
	1700 °C	1000°C 4hO ₂	800°C 4h
0.45:0.45:0.1			Ar+4%H2
	4hours	(0.2L/m)	(0.2L/m)

Table.1 Information of simulated nuclear fuel debris

2.2 Results and Discussions

The powderization of the simulated debris pellet with a molar ratio of U, Zr, Ca, 0.45, 0.45, 0.10 was confirmed.

The solubility rates of the original sample, as well as after oxidation and reduction in nitric acid and hydrochloric acid respectively are 95.7%,96.0%,95.9% and 98.5%,97.5%,98.7%.

This work is financially supported by the Nuclear Energy Science & Technology and Human Resource Development Project (through concentrating wisdom) from the Japan Atomic Energy Agency / Collaborative Laboratories for Advanced Decommissioning Science.



Fig.1 Photos of simulated debris U:Zr:Ca=4.5:4.5:1 1700°C (Left:before Redox Middle:after oxidation Right:after Redox)

References

[1]Washiya T., et al. Proc. 23th Inter. Conf. Nucl. Eng. p. 37

3.2.8 廃止措置プラントにおける確率論および是正措置プログラムによる リスク管理研究

所属	長岡技術科学大学	上坂	昌生	Masao	UESAKA
所属	東京大学	村上	健太	Kenta	MURAKAMI

1. 緒言

国内原子力発電所は 2011 年の福島第一事故以降 23 基 が廃止措置となり今後もこの数は増加するが、廃止措置 期間の設備劣化管理や効率的な設備管理に関する検討は 先行事例が少なく向上の余地が有る研究課題である。

本研究では原子力発電所の構成設備が数万点におよぶ ことから合理的な設備管理による安全性向上を志向し確 率論や是正措置プログラム (CAP) 統計データなどを用い 廃止措置における施設管理のパフォーマンス向上プログ ラム開発を行い、さらにこのプログラム検証を行った。

2. 廃止措置プラントの設備管理の課題と対応

2.1 設備管理の課題点

廃止措置プラントでは、設備の合理化により多重性等 が削減されるなど管理対象設備の変更に伴い重要度が運 転時とは異なることで、設備の重要度も大きく変わるこ ととなる。一方では、設備の保守などを含む管理はこの変 化に応じた管理方法となっておらず、これに起因した設 備不具合が発生することで安全機能が劣化する可能性が 有ることが課題と考えられる。

2.2 対策の検討

本研究では、廃止措置プラントに要求される安全機能 を有する設備について次に示す二つの観点で判断した廃 止措置における新たな重要度の整備および合理的な劣化 管理手法を定める。一つ目の観点はリスク評価の結果か ら燃料損傷リスクへの寄与度の高い設備、二つ目の観点 は原子力規制検査の観点から判断した設備であり、これ らについて、運転プラントで培った設備劣化管理の考え 方を用いて管理方法を検討した。廃止措置移行前後にお ける CAP データや運転プラントの CAP データとの比較 分析を行うことで、設備面、ヒューマンパフォーマンス面 の要因を抽出する。

2.3 対策の検証

前項で定めた設備劣化管理方法の妥当性について以下 のように検証を行った。廃止措置移行前後における CAP データと運転プラントのCAPデータとの比較分析を行う ことで、設備面については廃止措置プラントでの設備不 具合総数が減少しているが特定設備の不具合割合は増加 している傾向が確認されたこの要因などによる検証を実 施。また、ヒューマンパフォーマンス面の要因を米国 DOE が提唱する分析手法により確認し廃止措置プラントにお ける作業などの特徴を踏まえたパフォーマンス向上策の 提案と検証を行った。

3. 考察と結論

前記の設備劣化管理方法の検討から、廃止措置プラン トでは特にプラント状況に応じた保全方式の適切性が設 備パフォーマンスに影響することが確認され、保全方式 とそのベースとなる保全重要度のベースとなる考え方を 定める重要性が確認されこれについても検討を実施。

ヒューマンパフォーマンスの面では廃止措置と運転プ ラント共通的に組織自体の管理能力の課題点が確認され これに対する一方策を示すことが出来たものと考える。

・原子力学会(3月26日)で一部内容を発表予定 ・SMiRT(3月7日)で同一内容を発表済

参考文献

- J.Kaulard. safety and radiation protection, Advances and Innovations in Nuclear Decommissioning Sec.2, Aachen, Germany (2017), pp.31-33
- [2] 上坂,村上「廃止措置プラントにおける是正処置プロ グラム (CAP 管理)の向上検討」、日本保全学会 第19 回学術講演会要旨集,P39-40
- [3] IAEA, INTERNATIONAL ATOMIC ENERGY AGENCY, Safety Reports Series No. 82 IGALL, IAEA, Vienna, Austria (2015)

3. 学生発表(オーラル)

3.3 セッション3

(計測・分析技術部門)

This is a blank page.

3.3.1 斜め入射超音波を用いた水位計測法開発に関する基盤研究

東京工業大学ゼロカーボン研究所	菊地	航平	Kohei Kikuchi
東京電力 HD 株式会社	鈴木	武志	Takeshi Suzuki
室蘭工業大学	荘司	成熙	Naruki Shoji
東京工業大学ゼロカーボン研究所	木倉	宏成	Hiroshige Kikura

1. 緒言

福島第一原子力発電所は、東北地方太平洋沖地震によ り被災し過酷事故を引き起こした。事故により原子炉圧 力容器内の水位を計測する差圧計で誤計測が発生し、水 位の正確な測定が困難となった。そこで、我々は過酷な条 件下でも正確に水位を測定できるよう、斜め入射超音波 を用いた新たな水位計測手法を考案した。本研究では、実 験とシミュレーションにより本手法の検証を行い、将来 圧力容器に適用することを目指す。

2. 計測原理

本手法ではFig.1のように、斜め入射する超音波パルス を用いて計測を行う。超音波が容器の壁に入射したとき、 容器内が水の場合は一部が透過し、容器内が空気の場合 はほぼ全反射する。水位が上がるにつれ、受信信号の強度 が小さくなるため、受信信号の強度と水位の関係を明ら かにすることで水位計としての適用が可能となる。



Fig.1 Principle of water level measurement

3.実験と数値解析

3.1 実験方法

実験装置は、アクリル製の水槽を作成し、板厚 5mm の アルミニウムで仕切った。超音波 TDX をセンサ間 150mm で上下に角度をつけて設置し、下側の TDX の設置位置を 水位 0%、上側の TDX の位置を水位 100%とした。実験 は、下側のTDXから発信した超音波パルスを上側のTDX で受信して信号強度の計測を行った。TDXの角度を5度 から40度まで変化させ、それぞれの角度において水位を 0%から100%まで変化させながら計測を行った。

3.2 数值解析方法

数値解析は 2 次元簡易モデルを用いた有限要素法によ る伝搬解析を行った。解析コードは、超音波の伝搬を効率 的に解析できる ComWAVE[®]を使用した。実験装置と同様 の計算モデルを構築し、室温・大気圧下、メッシュサイズ 0.05mm 角、クーラン数 0.7 の元で計算を行った。

3.3 結果

Fig.2 に25 度における水位と水位0%の値で除して規格 化した信号強度の関係を示す。実験と数値計算の結果は おおよそ一致しており、水位が上昇するにつれて受信信 号が減衰していることが確認された。



4. 結言

新たな水位計測手法を提案し、実験と数値計算で検証 を行った。理論通り、水位によって信号の減衰が見られ、 水位計としての適用可能性が示唆された。

参考文献

 Yasushi Takeda, "Ultrasonic Doppler Velocity Profiler for Fluid Flow", Springer Tokyo, pp.21-41, 2012.

3.3.2 ガンマ線エネルギースペクトルデータを用いた 機械学習による線源分布推定

福島大学

熊田 有華

Yuka KUMADA

1. 序論

放射性物質の除染、廃炉作業時の安全性の確保のため、 放射性物質の分布を事前に把握する技術が必要とされて いる。 y線エネルギースペクトルを学習させた機械学習 による分布推定が行われ、シミュレーションで得たデー タの検証において推定結果を得た^[1]が、測定データ検証 時に無視できない誤差が生じていた。これはy線エネル ギースペクトル形状の相違によるものであり、再現性を 高めるため細かなパラメータを加えると計算時間が増大 してしまう課題が残されていた。

本研究では、新しい機械アルゴリズムを導入し測定γ 線エネルギースペクトル形状変換という作業を経ること で、実際の測定データからでも精度の良い放射線源分布 推定を可能にすることを目指し、その精度を検証した。

2. 研究手法

線源が二次元平面上に置かれた場合での推定精度を検 証する。28 cm × 28 cm を一辺 7 cm の16 メッシュで 分割し、いずれかのメッシュ中央に¹³⁷Cs、⁶⁰Co のγ線 源をランダムに0~2 個配置し、各メッシュ 3 cm 上に検 出器を置いた体系を想定した。計算には日本原子力研究 開発機構が開発したモンテカルロ計算コードの PHITS (ver. 3.280)^[2]を用いた。これらの計算 y 線エネルギースペ クトルデータと、線源分布データをセットにして教師あ り学習を行い、線源分布推定のための機械学習を構築し た(このプロセスを ML1 と呼ぶ)。検証に用いる実際の 測定データはNal 検出器(キャンベラ-ジャパン製.MCA: OSPREY)を使用した。次に、測定データを変換するため、 計算データと測定データ間のスペクトル形状を補正する 学習を行った。計算・測定γ線エネルギースペクトルデー タをセットにして教師あり学習を行い、検証に使用する 測定データの変換を Fig.1 のように行った (ML2)。





Fig.1 Comparison of energy spectra at A-4 points

推定結果を Fig.2 に示す。Fig.2(a)が正解分布、Fig.2(b)は 計算データによる検証結果である。測定データ検証時に は Fig.2(c)のように本来無い場所に線源が推定されていた が、ML2 による変換後、Fig.2(d)の結果が得られ LOSS が 大幅に抑えられた。以上のように機械学習によるスペク トル変換の過程を経ることで、測定 γ線エネルギースペ クトルデータからの線源分布推定の精度向上が示された。



Fig.2 Estimation result and squared error (LOSS)

日本原子力学会(9月7日)で同一内容を発表済 参考文献

- Uemura and Yamaguchi: Estimation of radiation source distribution using machine learning with γ ray energy spectra, J. Adv. Simulat. Sci. Eng. 7, 71-81(2020)
- [2] T. Sato, Y. Iwamoto, S. Hashimoto, T. Ogawa, T. Furuta, S. Abe, T. Kai, Y. Matsuya, N. Matsuda, Y. Hirata, T. Sekikawa, L. Yao, P.E. Tsai, H.N. Hunter, H. Iwase, Y. Sakaki, K. Sugihara, N. Shigyo, L. Sihver and K. Niita, Recent improvements of the Particle and Heavy Ion Transport code System PHITS version 3.33, J. Nucl. Sci. Technol. 61, 127-135 (2024)

3.3.3 放射線源分布推定のための機械学習手法の3次元拡張

福島大学共生システム理工学研究科 近藤 勇斗

1. 序論

福島第一原子力発電所事故の発生により、原子炉内部 の核燃料が溶解し構造物と混ざり合うことで燃料デブリ を形成した。炉内のデブリの分布を把握することは廃炉 措置に欠かせない。そこで、測定した放射線から、ニュー ラルネットワークという機械学習アルゴリズムを用いて 放射線源分布を推定する手法が提案された[1]。

先行研究では、2次元平面状の線源分布を推定対象とし ており、3次元空間上に分布するデブリを推定するために は、手法の拡張が不可欠である。そこで本研究では、放射 線のデータから、機械学習によって3次元空間上の線源 分布を推定する手法を開発した。

2. 手法

2.1 放射線のシミュレーション

機械学習を行うには多量なパターンのデータが必要で あるため、PHITS[2]を用いたシミュレーションによって、 データを作成した。シミュレーションモデルを Fig.1 に示 す。線源の大きさは 1cm³とし、5cm×5cm×5cm の空間 にランダムに分布している。7cm×7cm と 9cm×9cm の 平面で線源分布を囲むように設置し、3 次元空間に放出さ れるγ線を検出する。全ての検出面は 1cm²のメッシュで 分割されている。



Fig.1 Simulation model

2.2 データの学習

検出面で得られた y 線スペクトルをニューラルネット ワークに入力し、線源分布を解答として、対応関係を学習 させる。学習後のニューラルネットワークに、学習に含ま れていないパターンの y 線スペクトルを入力し、線源分 布を推定する。

Yuto Kondo

3. 推定結果

Fig.2 は線源分布の解答と推定結果、平均二乗誤差を Fig.1 のモデルにおける z 軸上 1.0cm ごとに可視化した図 である。全検出面で得られたデータを用いることで、線源 分布を高い精度で推定することができた。



Fig.2 Answer and estimation results for source distribution

参考文献

- [1] T. Uemura and K. Yamaguchi, J. ADV. SIMULAT. SCI. ENG. 7(1), pp71-81(2020)
- [2] T. Sato et al.: Recent improvements of the Particle and Heavy Ion Transport code System PHITS version 3.33, J. Nucl. Sci. Technol.

3.3.4 質量分析イメージングの効率化を支援するソフトウェアの開発

福島大理工、原子力機構	柳澤	華代	Kayo YANAGISAWA
福島大理工	橫田	裕海	Hiromi YOKOTA
原子力機構	松枝	誠	Makoto MATSUEDA
福島大 IER	石庭	寛子	Hiroko ISHINIWA
福島大理工	藤本	勝成	Katsushige FUJIMOTO
福島大理工、福島大 IER	高貝	慶隆	Yoshitaka TAKAGAI

1. 緒言

福島第一原子力発電所の廃止措置において、燃料デブ リの取り出しは重要な課題の一つである。燃料デブリは 核燃料や制御棒、原子炉構造材が不均一に混合し、冷え固 まったものと考えられており、その組成(元素・同位体) や分布を把握することは燃料デブリ取り出し後の保管・ 処理・処分方法を策定する上で極めて重要である。

レーザーアブレーション-誘導結合プラズマ質量分析 法(LA-ICP-MS)を用いた質量分析イメージングは、10-100µmの空間分解能で10⁻⁴-10⁻¹µg/gレベルの元素および 同位体の分布を視覚化できるため、先述の燃料デブリ分 析に有用である。しかし、測定点が多いとデータ量は膨大 となり、手動処理には多大な時間と労力を要する。そこで、 本研究では罰則項付き非対称最小二乗法を用いたピーク 自動検出法を開発するとともに、LA-ICP-MSのデータ処 理を自動化し、直感的に操作可能なGUIを構築した(Fig.1)。

2. 方法

2.1 LA-ICP-MS を用いたデータ取得

本研究では ESL 製 LA 装置(NWR213、213 nm Nd:YAG レーザー)と PerkinElmer 製 ICP-MS(NexION300S)から構 成される LA-ICP-MS を用いた。プログラムの動作確認の ため、エネルギー: 10 J/cm²、繰返し率: 10 Hz、レーザーサ イズ: 50 µm のレーザー条件にて、アカネズミ奥歯の樹脂 包埋試料(分析領域: 3.25 cm×1.90 cm、2470 測定点×8 核種) を測定した。レーザー照射は各測定点で 2 秒間行い、30 秒間の待機時間を挟んで次の照射を行った。ICP-MS はレ ーザー照射中の信号強度を連続的に取得し、測定終了後 は XL ファイルとして出力した。 レーザーアブレーションによって生じたエアロゾルが ICP-MS に導入されると過渡的なピーク状信号が得られ、 これは各測定点に対応する。出力された信号強度データ から分析対象核種の分布画像を作成するには(1)ピークの 検出、(2)ピーク強度の積分、(3)レーザー照射位置情報と の対応付けが必要であり、これらは従来 Excel などにより 手動で処理されていた。本研究ではまず(1)について罰則 項付き非対称最小二乗法を用いて計測データy=(y1、...、 ym) に対するz=(z1、...、zm)を式(1)より求め、zを上回 るyをピークとして検出する方法を開発した。

 $z = \{\sum_{i=1}^{m} w(y_i - z_i)^2 + \lambda \sum_{i=1}^{m} (\Delta^2 z_i)^2\}$ (1) ここで、 λ は罰則項の正則化パラメータであり、w は非対称重みである。ピーク検出ができない(i.e.、分析対象核種を含有していない)場合、検出済みのピーク間距離および頻度を参照し、ランダムに振り分けることで、測定点数に対応したデータ数を確保できるようにした。また、(1)~(3)について Python により自動処理プログラムを作成し、さらに、このプログラムを直感的に操作できるよう Tkinter を用いて GUI を構築した。2.1 で得たデータを手動で処理すると 20 時間かかったが、本 GUI を用いることで約2分にまで短縮でき、99.8%の時間削減を実現した。



Fig.1 Overview of developed GUI

2.2 データ処理

3.3.5 同位体分析装置による少量燃料デブリの性状把握分析手法の確立

工学院大学大学院 電気・電気工学専攻 工学院大学 応用物理学科 工学院大学大学院 電気・電気工学専攻 名古屋大学 総合エネルギー工学専攻
日本原子力研究開発機構 CLADS
日本原子力研究開発機構 大洗研究所
東京電力ホールディングス 福島第一廃炉推進カンパニー

1. 背景

現在、福島原発の廃炉に向けて様々な取り組みが行わ れている。その中で特に重要な課題が、燃料デブリの取出 しである。この作業には安全性が求められるため、燃料デ ブリの性状把握が必須である。さらに、放射性ダストをは じめとしたµm 程度の放射性微粒子の発生も予想される ため、対策と性状把握が必要とされている^[1]。その為、ICP-MS や放射線測定をはじめとするバルク分析が行われて いるが、微小視野の同位体の分布情報が欠落してしまう 問題があった。その為、我々の研究室では、FIB-TOF-SIMS 装置^[2]と共同研究先と開発した Ti: sapphire 高繰り返し率 レーザーによる共鳴イオン化法を組み合わせた R-SNMS 法を開発し、同位体マイクロイメージングを1台の装置 で可能にした^[3]。本来 SIMS は、同重体干渉による影響を 受けるが、IP (イオン化ポテンシャル) を超える波長を2 段階に分けて照射することで選択的なイオン化を行うこ とが出来る。当装置の実用化に向けて、レーザーの波高値 やタイミングの監視や、現在手動の箇所の自動化を行っ ているほか、燃料デブリを模して安全同位体で製作され た模擬燃料デブリを用いて、分析手法の開発・実証を行っ た。特に再臨界評価などでは同位体比や分布は注目され ている。その中の元素で、今回はNdに焦点を当てて、分 析を行った。Ndは、UのFPであり、軽水炉の燃焼度評 価等にも使用されている。しかし、Ce と質量干渉が発生 し質量数 142 で重複してしまうので信号を分離すること が困難である。本発表では本研究室で開発した R-SNMS 法によってこの問題を解決した結果を示す。

吉村	昌稀	Shoki Yoshimura
森田	真人	Masato Morita
坂本	哲夫	Tetsuo Sakamoto
富田	英生	Hideki Tomita
三浦	裕樹	Hiroki Miura
岩田	圭弘	Yoshihiro Iwata
宮部	昌文	Masabumi Miyabe
関尾	佳弘	Yoshihiro Sekio
前田	宏治	Koji Maeda
溝上	暢人	Masato Mizokami

2. 実験方法 · 結果

2.1 サンプル・使用装置

本研究では JAEA から提供された模擬デブリをインジ ウム基板に固定して分析を行った。装置は第1章で説明 した FIB-TOF-SIMS および R-SNMS により分析を行った。

2.2 実験結果 · 考察

FIB-TOF-SIMS での分析では Ce と Nd が質量干渉し、 ¹⁴²Nd の本来のスペクトルを確認できい。しかしながら、 R-SNMS による共鳴イオン化を行い分析した結果、Ce の スペクトルが減少し、質量干渉を抑制することができた。 R-SNMS の分析時に Ce の非共鳴スペクトルが乗ってし まったのは、励起に使用しているレーザーの強度を高く しすぎた為に Ce の非共鳴イオン化してしまったと思わ れる。



Fig.1FIB-TOF-SIMS では見分けられない Ce と Nd を R-SNMS によって Nd のみをイオン化したイメージング象。

FDR2022(9 月 29 日)で同一内容を発表済 参考文献

- [1]K. Shunsuke, et al., JAEA-Review,(2020)
- [2]T. Sakamoto, et al., Appl. Surf. Sci. 255, 1617-1620 (2008).
- [3]T. Sakamoto, et al., Anal. Sci. 34, 1265 (201

3.3.6 廃炉に向けた中性子検出用新規シンチレータ結晶の開発

東北大工学研究科·金研	浦野	雄介	Yusuke URANO
東北大金研・NICHe, 大阪大レーザー研	黒澤	俊介	Shunsuke KUROSAWA
東北大金研・NICHe	山路	晃広	Akihiro YAMAJI
東北大金研・NICHe	吉川	彰	Akira YOSHIKAWA

1. はじめに

リアルタイムで原子炉内部の放射線線量率をモニタす るため、当研究室ではシンチレータの発光を長さ50~100 mの光ファイバーで伝送し、炉外にて CCD 分光器カメラ で読み出す方法を開発している[1]。そこで使用するシン チレータには、光ファイバーの発光由来のノイズとの弁 別能が良い500 nm以上の長波長発光かつ高い発光量を示 すことが要求されている。また、原子炉内部にはガンマ線 だけでなく²⁴⁴Cm や²⁴²Cm からの中性子の存在も示唆さ れており[2]、再臨界が生じていないことを見るためにも、 中性子の詳細なマッピングも必要である。ハロゲン化物 シンチレータの Cs₃Cu₂Is(CCI)[3,4]は、発光量が41,500 光 子/MeV で CsI よりも吸湿性が低いといった特性を有す る。そこでわれわれは、CCI に中性子捕獲断面積の大きい ⁶Li を含んだ Cs₃(Cu, Li)₂Is(CCIL)結晶を育成し、その発光・ シンチレーション特性について評価を行った。

2. 実験方法

Li の添加量を変えた CCIL 結晶を垂直ブリッジマン・ ストックバーガー法にて育成した。育成した結晶の相同 定は、粉末 X線回折 (粉末 XRD) 装置 D8 Discover, Bruker 社) により行った。その後、発光および励起スペクトル測 定を、分光蛍光光度計 (FP-8300, JASCO 社)を用いて行 った。

X 線励起のラジオルミネッセンスを CCD カメラ (DU420-OE, ANDOR 社) で測定した。さらに、¹³⁷Cs 線 源と光電子増倍管(R7600U-200, 浜松ホトニクス社)、マ ルチチャンネルアナライザ(Pocket MCA8000D, AMPTEK 社)を用いて、ガンマ線励起による発光量を評価した。同 様に、²⁵²Cf 中性子線源から放出された高速中性子をパラ フィンブロックにて熱中性子程度まで減速させ、熱中性 子励起による発光量を見積もった。

3. 結果と考察

CCIL の単結晶を得ることに成功し、粉末 XRD の結果 から CCI の参考文献[3]と比較して、目的の相が得られて いることを確認した。¹³⁷Cs 線源のガンマ線励起による CCIL のシンチレーション蛍光寿命は、およそ 800 ns と見 積もられ、CCI よりも短くなっていることを確認した。ま た、熱中性子励起による CCIL の発光量は、Ce 添加 Li ガ ラス (GS-20、サンゴバン社)の発光量(6,000 光子/熱中 性子)と比べておよそ9倍と見積もられた。本講演では、 CCIL 結晶の育成の様子とその光学特性、およびガンマ線 や中性子で励起した際のシンチレーション特性について 報告する。



Fig.1 CCIL crystals obtained in the ampoule.

The 13th Advanced Lasers and Photon Sources Conference (ALPS2024) (4月22日) で同一内容 を発表予定

参考文献

[1] https://fukushima.jaea.go.jp/en/pamphlet/topics/pdf/topics-f ukushima070e.pdf.

[2] https://www.tepco.co.jp/decommission/information/commit tee/roadmap_progress/pdf/2022/d221222_08-j.pdf

[3] L. Stand *et al.*, "Crystal growth and scintillation proper ties of pure and Tl-doped Cs₃Cu₂I₅", J. Phys. Chem. C, 1 26 (2022) 12882.

[4] T. Jun *et al.*, "Lead-free highly efficient blue-emitting Cs₃Cu₂I₅ with 0D electronic structure", Adv. Mater., 30 (2 018) 1804547.

3.3.7 リアルタイム3D位置計測のためのカメラ画像分析と無線UWBを 組合わせた組込システムの開発

岐阜大学	岩田	君彦	Kimihiko IWATA
岐阜大学	松下	光次郎	Kojiro MATSUSHITA

1. 序論

現在,原子炉建屋内の線量計測作業において,精度 10cm 未満・簡易設置で運用可能なリアルタイム 3D 位置 計測システムの実装が急務な課題である.

そこで本研究では、「無線 UWB(Ultra Width Band)」と 「深層学習を活用した光学式モーションキャプチャ(複 数カメラ物体認識)」を組合せ、建屋内に簡易設置可能か つ安定にリアルタイム位置測位可能な組込システムの開 発を目指す.

2. 提案システム

提案システムを Fig.1 に示す. 設置位置が既知の子機を 3 台(子機・位置既知), 位置推定を行う子機1台(子機・位 置未知)を設置する. 深層学習により点灯 LED をカメラ 画像認識し, 2D 座標を推定する. 結果をメイン PC に集 約し子機・位置未知の3次元座標推定を行う. また, AR マーカーと深層学習を組合せ, アンカー子機の追加し, 初 期設置の3 台の死角となる範囲での位置推定を可能とす る(Fig.2-(a)). 無線 UWB では, 位置既知のアンカー3 台を 用いて, 子機・位置未知の位置を推定する.



Fig.1 Proposed system.

4. 実験 1: AR マーカーによるアンカー追加で の性能検証

子機・位置既知3台設置状態に対し、アンカー3台を設 置した. さらに、子機・位置既知3台の死角となる位置 に子機・位置未知を設置し3次元座標の推定を行った. 結果,子機・アンカー、子機・位置未知ともに10cm 未満 の精度で計測可能であった.(Table.1)

Table.1 3D position estimation accuracy using DNN.

Camera	Actual position [cm]	Estimated position [cm]	Accuracy [cm]
Known 1	(0, 0, 0)	-	-
Known 2	(67, 0, 0)	-	-
Known 3	(-46, 0, -3)	-	-
Anchor 1	(0.5, -4.9, 182.0)	(-3.0, -2.5, 175.0)	8.2
Anchor 2	(59.0, -5.2, 191.4)	(52.0, -2.5, 190.0)	7.6
Anchor 3	(101.0, -4.5, 188.8)	(93.0, -2.5, 188.0)	8.3
Unknown	(123.8, 11.0, -1.5)	(130.0, 7.0, 0)	7.5

4. 実験2: 無線UWB による3 次元位置推定

UWB-Tag を用い, アンカー3 台と子機・位置未知を用 いて,子機・位置未知の3 次元座標推定システムを構築 し,3次元位置推定を試みた(Fig.2). 結果、リアルタイム での子機・位置未知の3 次元位置推定およびモニターで の確認が可能であることを示した.



Fig.2 3D position detection using UWB.

5. 結論

本研究では、深層学習を活用した光学式モーションキ ャプチャ(複数カメラ物体認識)によるアルタイム3次 元位置推定システムを開発し、性能検証を行い、子機・位 置未知の3次元位置推定、アンカー設置による推定範囲 拡張が可能である事を示した.また、無線UWBを用いた リアルタイム3次元位置推定が可能である事も確認した.

3.3.8 クリアランス制度対象物を扱うビジネスモデルの一考察 -サンオノフレ原子力発電所との意見交換を手掛かりとして-

埼玉大学博士後期課程 人文社会科学研究科 経済経営系専攻 瀧波 康修

Yasunobu TAKINAMI

1. 廃棄物リサイクルのビジネスモデル

日本では廃止措置で排出される廃材の90数%はNR廃 棄物(放射性廃棄物ない廃棄物)とクリアランス物(放射性 物質として取り扱う必要のないもの)で構成されている。 しかし、このほとんどが再利用されていない現状がある。

そのため、本プロジェクトでは、廃止措置で発生した解 体撤去物の利用を考えた。再利用方法としては、これらに 多く含まれる鉄材を南部鉄器などの伝統工芸品とのコラ ボレーションし、商品化する案とした。これにより、廃止 措置から利潤を生みだせるメリットや環境リサイクルを 配慮したプロジェクトとして紹介をサンオノフレ原子力 発電所にて行った。

2. サンオノフレ原子力発電所所員とのディス カッションから得られた知見

1で作成したビジネスモデルに対して、サンオノフレ 原子力発電所所員とディスカッションした。われわれの ビジネスモデルは、アメリカにおいても「ビジネスモデル として成り立つ」との回答を得た。というのも、アメリカ は他国からも廃棄物を受け入れており、それを活用した ビジネスは成り立つという背景があったからである。

一方で、「このような付加価値(南部鉄器とのコラボレ ーション案)が発電所由来の金属を有効利用できている かは検討する必要がある」との指摘をうけた。発電所から は大量の金属が出る一方で、クラフトは数百グラム程度 の規模となる。全てを有効利用すると大量生産する工程 が追加発生する。

「例えば、飛行機や鉄道などは、大量の鉄を使用する。 そのような分野への再活用も考えたほうが、大量の鉄を 有効利用するという観点で見ると良いのではないか」と の提案を受けた。その提案を受けて、再度、われわれはビジネスモデルを深化させていきたい。



Fig.1 Discussion Member ディスカッション日:2023 年 10 月 30 日 視察場所:サンオノフレ原子力発電所 担当メンバー:窪川 嵩之, 瀧波 康修, 小宅 巧馬, 近藤 大洋。

日本原子力学会(3月詳細日時未定)で同一内 容を発表予定。

謝辞

本海外派遣研修は、「原子力施設の廃止措置を統括す るグローバル人材育成」(令和5年度文部科学省「国際 原子力人材育成イニシアティブ事業 (原子力人材育成 等推進事業費補助金)」)の一環として東京大学 岡本 孝司教授、三輪修一郎准教授及びエネルギー総合工学研 究所 田中健一氏の指導の下で実施された。

また、訪問先であるサンオノフレ原子力発電所の所員 のみなさまには、多忙中にも関わらず議論のうえ助言を いただいた。ここに記して、深く感謝申し上げたい。

4. 学生発表(ポスター)

4.1 グループ 1

This is a blank page.

4.1.1 機械学習を用いた燃料デブリ収納缶における放射線源分布の推定

佐藤大耀^{1*},山口 克彦¹ 1福島大学共生システム理工学類

序論

- 機械学習によりv線スペクトルから放射線源分布を推定する手法が提案 されている[1]。
- 原発事故後、発生した高濃度放射線を含む燃料デブリは、特別な収納 缶に収容し処理されることが計画されている。
- 本研究では、上記のようなモデルを構築し、γ線スペクトルを測定して機 械学習を行い、線源分布を推定することで、収納缶においても安全に取 り扱えるようにすることを目的とする。





図1のようなモデルを設定し、 測定データと計算データの2種 類を計測・算出する。NaIスペ クトロメーターを使用してγ線ス ペクトルを測定し、これを検証 データとする。計算データには、 モンテカルロ法によって放射線 の挙動をシミュレーションする PHITS[2]を使い、学習デ タとする。

図1 収納缶モデル図

線源分布の推定を行うため、機械学習アルゴリズムの一種であるニューラ ルネットワークを用いて、教師あり学習を行う。推定精度を評価するLoss 関数を平均二乗誤差で計算する。



図2 放射線源分布推定を行うための機械学習モデルとLoss関数

しかし、測定データを検証データにする場合に、計算データと測定データでス ペクトルの形状に差異があるためうまく推定ができない。それを改善するために、どちらの場合でも、線源の位置をおおまかには推定できている。 測定データを計算データに近づけるための機械学習も行う。



結果

まず測定データを計算データに近づける変換(図5)をした。137Csを2個配置 した場合を10パターン実際に測定し、8パターンを学習データ、残りの2パター ンを検証データにした。



図5 測定データの変換

次に変換したスペクトルを検証データとして放射線源分布の推定を 行った。変換したデータを検証データとして¹³⁷Csを2個配置した場合の 推定を図6の左側に示す。また、137Csと60Coを1個ずつ配置した場合でも、ス ペクトルの変換後推定を行った。



図6 変換データでの推定結果

60Co線源は105Bqと137Cs線源よりも10倍強度が強いが、おおまかな推定が 可能であることがわかった。もっと精度を向上させるためにも、測定データの数を増

やしスペクトルの変換を行うことが考えられる。

- Takero Uemura, Katsuhiko Yamaguchi: Estimation of radiation source [1] distribution using machine learning with y ray energy spectra, Journal of Advanced Simulation in Science and Engineering, 7:1 (2019), 71 81.
- Tatsuhiko Sato, Yosuke Iwamoto, Shintaro Hashimoto, Tatsuhiko Ogawa, [2] Takuya Furuta, Shin-ichiro Abe, Takeshi Kai, Pi-En Tsai, Norihiro Matsuda, Hiroshi Iwase, Nobuhiro Shigyo, Lembit Sihver, Koji Niita: Features of Particle and Heavy Ion Transport code System (PHITS) version 3.02, Journal of Nuclear Science and Technology, 55:6 (2018), 684-690.

4.1.2 PCV内部調査動画の利活用支援システムの 開発に向けた予備的研究

木村朋希 尾形祥浩 佐々木健太 藤本勝成(福島大学)



4.1.3 環境にロバストな立体型パッシブ無線センサタグの開発

横浜国立大学	内山 実則	Uchiyama MINORI
横浜国立大学	久我 宣裕	Kuga NOBUHIRO

1. まえがき

放射線環境下では有人による放射線量測定は困難であ り、測定環境に散布し無人でセンシングを行う遠隔測定 用端末が必要となる。そこで受信波の二次高調波でセン サ情報を送信するハーモニックタグが提案された[1]。こ のタグは平面型であり散布した際、床面に向いてしまう と通信が不可能となる。本稿ではこの問題を解決するた めにタグを立体化する検討を行った。タグの受信波 f₁= 2.45GHz、送信波 2f₁=4.9GHz を用いた。

2. ハーモニックタグの構成

Fig. 1にハーモニックタグのシステムブロックを示す。 Rx_tでfl を受信しデジタル変調回路を通してキーイング、 周波数変換回路で2fl に変換され Tx_tから放射される。デ ジタル変調回路では PIC マイコンで処理される情報に応 じたキーイングが行われ、PIC マイコンがセンサと連携す ることでタグからセンサ情報を送信する。Fig. 2がハーモ ニックタグの構成である。タグアンテナにはパッチアン テナを使用し、2fl のアンテナはアレー化した。Fig. 1の 回路部の機能を持つ回路基板とアンテナ基板をコネクタ により接続し一体化した。Fig. 3がキーイングを行った際 の回路基板の入出力特性である。この平面型タグを複数 隣接させた構造を取ることで立体型タグを製作した (Fig. 4)。

3. 通信実験によるシステムの評価

システムの妥当性を確認するために通信実験を行った。 Fig.4のように基地局から fl を送信しタグで二次高調波 に変換して PIC マイコンから放射面ごとに異なる ID を 送信する制御を行い基地局でタグから放射される二次高 調波を受信した。二つの面から放射される波形を観測し 立体化した構造で通信可能なことを確認した。Fig.5が基 地局での受信波形である。波形から各面の ID を読み取る ことができ、システムの妥当性を確認した。以上の結果か ら PIC マイコンと放射線センサを連携することで放射線 量を遠隔で測定することが可能であると考えられる。

4. まとめ

本稿ではハーモニックタグの立体化を行い、立体型ハ ーモニックタグでデジタル情報を送信できることを確認 した。放射線センサとタグの一体化は今後の課題である。



Fig.1 System block of harmonic tag sensor



Fig.2 Composition of tag

Fig.3 ON-OFF Characteristic

of tag Circuit







(a)One radiation surface (b)The another radiation surface Fig.5 Wave form of carrier transmitted from harmonic tag 参考文献

[1] 内山 他、2023 電子情報通信学会ソ大、B-1-121





4.1.6 FPGAに実装する耐放射線A I

DING HAITAO, 渡邊 実, 渡邊 誠也 岡山大学 環境生命自然科学研究科

研究背景

福島第一原子力発電所の原子炉は、2011年の津波災害で全 電源を喪失し、最終的にメルトダウンした。福島第一原発の 原子炉や溶融した核燃料周辺の放射線量は、現在の推定で毎 時1,000Svを超えていると考えられており、このような環境で は、人は30秒以内に致死量の放射線を受けることになる。そ のため、福島第一原発の廃炉作業では、放射線に強いロボッ トを使う必要がある。

こうした放射線に強いロボットが作業を行う際、より自律 的で正確な作業を行うためには、カメラで撮影した画像をリ アルタイムで画像認識する必要が生じる。しかし、このよう な高放射線環境では、画像認識に用いる集積回路が短命とな る。そこで、トータルドーズ耐性を高めたAIの研究を進めて いる。多重化実装を用いることで、集積回路のトータルドー ズ耐性を改善する。

ニューラルネットワークをFPGAに 実装

畳み込みニューラルネットワークは画像の認識に適してい る。本研究ではFPGA上に畳み込みニューラルネットワーク を実装した(将来的には耐放射線性能の高い光再構成型ゲー トアレイに置き換える予定である)。畳み込みニューラル ネットワークの計算は比較的単純で、主に乗算と加算により 実現できる。そのため、画像データの処理方法や画像、重み などのデータが計算を開始する際には、それらが時系列に 沿って正確に計算されるようにすればよい。

1、畳み込み層のハードウェア設計(6チャンネル)



2、スライディングウィンドモジュール(入力画像の処理)



畳み込み演算を実行する場合、畳み込みカーネルが画像 全体を走査して順次畳み込み演算を実行できるように、画像 を複数の畳み込みカーネルサイズに分割する必要がある。こ

れは一般的に、スライディングウィンドウモジュールを用い て行われる。

入力画像のサイズが28*28、畳み込みカーネルサイズが5*5 であるとすると、上図に示すように、畳み込みの開始時には、 28*5=140個の画像画素データ、すなわち5行分の画像画素 データがメモリにキャッシュされ、この140個の画像画素デー タのうち、最初の5列分のデータが畳み込みカーネルによる最 初の畳み込み演算のために選択される。処理が進むと、新し い1列の画像画素データを5*5ウィンドウにロードし、左端の1 列の画像画素データを割除し、畳み込みカーネルによる畳み 込み演算を実行する。この操作により、畳み込みカーネルが 画像全体を走査して畳み込みの効果が得られる。





FPGAのハードウェア回路では、畳み込み演算は加算器と 乗算器を通して実装される。上図に示すように、畳み込み演 算は、5*5のサイズの畳み込みカーネルを画像画素データと畳 み込みをして、各畳み込み演算の結果を得る。この順序で順 次実行されていく。

多数決回路(三重化回路)

多数決回路は、複数の入力信号を受け取り、その中で最も 多くの信号を判定するための回路である。これに基づいてエ ラー訂正することができる。本ニューラルネットワークには この3重化回路実装を適用する予定である。



今後の課題

本研究では、畳み込み層のハードウェア実装まで行った。 次のステップはプーリング層と全結合層のハードウェア回路 を設計し、FPGA上で完全な畳み込みニューラルネットワー クを実現することである。

4. 学生発表(ポスター)

4.2 グループ 2

This is a blank page.

JAEA-Review 2024-045



4.2.2 金属系燃料デブリの材料推定に関する基礎的研究 - 部分溶出した金属イオンのICP-MS分析とパターン分類 --

十文字快* 嘉山馨菜* 勝又風雅* 丹治珠緒* 古川真*,+ 高貝慶隆* 藤本勝成* * 福島大学, + PerkinElmer Japan GK



4.2.3 デブリサンプリングデータから作成された凝固経路図の 実験的検証 福井大学 宇埜研究室 秋元佑介



Reference

昇降降温過程を繰り返すことにより、熱応力でUO₂の粒界が割れ、 そこを通じて溶融したZrやFeが侵入したと考えられる。

[1] Hiroshi Ohgi, Yuji Nagae, Masaki Kurata "Thermodynamic Evaluation on Solidification Path for U-Zr-Fe-O corium" FDR2022-1066



JAEA-Review 2024-045



JAEA-Review 2024-045



5. NDEC-9 実行委員会名簿

委員長	鈴木	俊一	(東京大学)
副委員長	宇埜	正美	(福井大学)
委員	小峯	秀雄	(早稲田大学)
	山口	克彦	(福島大学)
	高貝	慶隆	(福島大学)
	髙橋	隆行	(福島大学)
	藤本	勝成	(福島大学)
	岡本	孝司	(東京大学)
	淺間	_	(東京大学)
	小原	徹	(東京工業大学)
	小林	能直	(東京工業大学)
	渡邉	豊	(東北大学)
	堂﨑	浩二	(東北大学)
	新堀	雄一	(東北大学)
	永井	康介	(東北大学)
	小無	健司	(東北大学)
	鈴木	茂和	(福島高専)
	川崎	大介	(福井大学)
	中村	隆之	(原子力損害賠償・廃炉等支援機構)
	小野	喬	(原子力安全研究協会)
	佐藤	勇	(東京都市大学)
	成瀬	継太郎	(会津大学)
	茶谷	恵治	(日本原子力研究開発機構)
	鷲谷	忠博	(日本原子力研究開発機構)
事務局			
	黒木	亮一郎	(日本原子力研究開発機構)
	田川	明広	(日本原子力研究開発機構)
	伊藤	倫太郎	(日本原子力研究開発機構)
	宇佐美	€ 博士	(日本原子力研究開発機構)

This is a blank page.